
ねことお姫様

ちくわ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねことお姫様

【Nコード】

N50580

【作者名】

ちくわ犬

【あらすじ】

猫のいない「ねずみ天国」と呼ばれる小さな国で悪い魔女と戦おうとしたお姫様は魔女に「猫」に変えられてしまいます。何も知らない猫嫌いの王様は娘が猫になったことに気付きません。親切な謎の少年と共に悪い魔女を倒して小さな国に再び幸せは訪れるでしょうか。

むかし、むかし、あるところに……で始まる物語。

魔女とお姫様

> i 1 3 5 1 4 — 7 9 5 <

むかし

むかし

あるところに

緑豊かな小さな国がありました。

隣の国々からは大きな河に囲まれて河の向こう側から見ればポツリと島のように浮ぶ夢のような国です。

その国の人々は心優しく皆親切でした。

その国の王様もとても人柄が良いとの評判です。

でも、この国には「猫」が一匹もいません。

お小さい頃に戯れて鼻を噛まれた王様が「猫」を嫌いになってしまい、この国から追放してしまつたのです。以来この国には猫が入れなくなりました。見つかると…即刻追放。近隣の国の人々は何時しかこの国を「ねずみ天国」と言うようになりました。

さて、そんな「ねずみ天国」の王様には一人娘のミーツエというお姫様がいます。大変おてんばですが賢いお姫様でした。王妃様はお姫様がまだお小さい頃にお亡くなりになっていたので、お姫様が結婚の出来る16歳になったことで王様は新しく王妃様を迎えることになりました。

明日は新しい王妃様をお迎えするというその日、物語は始まるので
す。

「ローランド！証拠はそろったの！？お父様が納得されないと意味
がないのよ？お父様はあの魔女にメロメロにされているんだから！」

「はっ。大丈夫でございます、証拠も充分揃いました。この薬を飲
めば王は正しい心に目覚め、魔女の本来の姿を見れる事でしょう！」

「早く、お父様の所に急がないと！行くわよ！」

金色の髪を揺らしながらさくらんぼのような可愛らしい唇から急か
された言葉が出てきます。そう、彼女が水色の輝く瞳をもったこの
国のお姫様ミーツェ。その姿はどんな人でも立ち止まってしまっ
と愛らしいと評判です。

「そんなにお急ぎになってどこへ行かれるの？」

長い廊下に艶のある女の声が響きます。

急ぐ宰相ローランドを連れだしたミーツェが振り向くとそこには今一番
遭いたく無かった顔がありました。

「お、オリビエ……ど、どじやっていいに。」

ミーツエの顔が青くなりました。オリビエは王宮で明日の結婚式の為に美容マツサージを受けていたはずです。オリビエとは王様の結婚相手、ミーツエの新しい母親になる予定の人です。が、本当のこの女の姿は極東の国からきた悪い魔女で蛇の姿をしています。半年前からこの国に出入りしていた占者を名乗る妖艶な美女がこの国の王のハートを射止めたと巷でも評判でしたが、王に紹介されてから不信感を抱いたミーツエが調べてみるとこの美女が遠い東の国を滅ばしてしまった悪い魔女であることが分ったのです。当然、結婚を止めさせようとミーツエは奮闘しましたが、王様には酷いヤキモチにしか取ってもらえず、空回り。やつとの事で宰相ローランドと真実の姿が見えるという薬を手に入れて数々の魔女の悪い所業の証拠を持って王に会いに行くところだったので。

「ローランド、走って！早くお父様にその薬を！」

お姫様が叫びましたが、ローランドは目の前でねずみの姿に変えられてしまいました。

カラン、カラン。

苦労して手に入れた薬瓶が待ち散らされた書類と共にころがって行きます。ミーツエはそれを拾いに行こうと手を伸ばしました。

ドカッ

オリビエが冷えた顔のままミーツエのわき腹を蹴り上げました。小さな声と共にミーツエは廊下の窓にぶつかって倒れてしまいました。

「残念だったわねえ。上手く私に知られずに動いていたつもりでしょうが、お生憎様。」

ばちばちと書類が灰になって行きます。もう一度オリビエはミーツエのお腹を蹴り上げると痛みを堪えるのに必死なミーツエの顔を無理やり自分の方に向けました。オリビエはニタリと笑います。

「私の正体を知っているのはお前たち二人だけでしょう？くくつ。これで邪魔者はいなくなっただわ。そうねえ、小賢しいお前には私からささやかなプレゼントを贈ってあげるわ。」

そういうとミーツエの体が光に包まれました。

「ふふふつ。いい姿ですこと、お姫様。」

オリビエが顔を覗き込んで言いました。

しかし、痛みに耐えることしか出来ないミーツエはその場でうずくまる事しか出来ません。

やがて夕暮れだった外の景色は暗闇に変わり、寒さに震えていたミーツエは意識を失いました。

緑の瞳の少年

目を覚ましたミーツエが目にしたのはふかふかのシーツでした。シーツから出ようとしたミーツエは大きな腕にシーツの中へと引き戻されました。どうやら丸いベットに寝かされていたようです。

「起きたのか？怪我をしているんだ、もう少し寝てろ。」

甘い声がしてミーツエは混乱してしまいました。顔を上げるとミーツエよりも少し年上のような黒髪の少年がミーツエの顔を覗き込んできます。そして、そのまま、ミーツエの鼻の頭にちゅっとキスをしました。

『○×%\$#……。』

あまり突然のことにミーツエは声がでません。王様や王宮に守られて育った温室育ちのミーツエには刺激が強すぎます。

『い、いきなり何をするの!?!』

やっとの事で抗議しますが少年は不思議そうに首を傾げてミーツエを見ると

「そうか。腹が減ったんだな。」

そう言って銀色のお皿にミルクを注いでくれました。そこで、ミーツエはミルクの水面に映る一匹の子猫を見つけます。水色の瞳をした白い子猫です。部屋の窓に映る姿でも確認しましたが間違いなく丸い編み籠の上に寝かされた子猫です。

『なっ！なんてこと！』

驚いたミーツエはお皿をひっくり返してしまいました。それもそのはず、よりにもよって王様の大嫌いな猫の姿になつてるので、すくなくよく考えれば目覚めてからずっと違和感があつたのです。先ほどから少年がやたら大きく感じたのも、狭い掃除係のこの部屋がやたら広く感じたのもそのせいだと納得できました。

『わ、わたし、オリビエに猫にされちゃったんだわ。』

ローランドはミーツエの目の前でねずみにされていました。そのことを思い出すと胸が痛みます。

『ああ。あの女の考えそんな事だわ。かわいそうなローランド。お爺さんねずみにされちゃった…。』

ローランドは60歳。まだまだ元気ですが、姫からするとおじいさんですからね。せめてもの救いはこの国が「ねずみ天国」である事くらいです。

『きつと生き延びてね、ローランド。私がなんとかしなくっちゃ。』

そう意気込むミーツエも怪我を負った子猫です。自分の掌を良く見るとピンクの肉球がふかふかしています。ミーツエは絵でしか猫を知りませんがこうして見るとなかなか可愛いものだと思います。

「新しく入れてやったから今度は落ち着いて飲みな。」

優しい少年の声でミーツエは顔を上げます。猫を匿うなんてこの国ではありえないことです。見つければ追放されるでしょう。傷を負った動物を助けてくれるなんて優しい人なんだろうとミーツエは思いました。よく見ると少年の緑色の左目は先ほどから動きません。

『義眼なのね。親切にしてくれてありがとう。ちゃんと覚えておくわ。人間に戻ったら褒美を取らせるからね。でも、こんな綺麗な顔の掃除係がお城に居たのね。』

片目は義眼のようですが美しい少年です。お城の侍女たちの噂的になっていてもおかしくありません。

『新しく入った人かしら……まあ、いいわ。私はお父様の結婚式を止めに行かないと。』

まだ日はそう高くありません。正午から始まる結婚式には間に合うかもしれません。

ミーツエのわき腹が酷く痛みました。もしかしたら骨が折れているのかもしれない。でも、事は一刻も急ぐのです。なんとか王様の結婚式を止めないと。

「あ、こら！外に出たら見つかるぞ！」

少年の制止も聞かずにミーツエは走り出しました。

『お父様、待っていて！』

そのころ教会では正午から開かれる王の結婚式に出ようと大勢の人々が集まっていました。

魔女と結婚式

ミーツエは排水溝に身を隠しながら懸命に走って教会へと急ぎました。衛兵にでも見つければすぐにつまみ出されてしまいます。

『祭壇が見えてきたわ。良かった！間に合った！』

ミーツエは祭壇の裏に隠れて王が出てくるのを待つことにしました。司祭の足がちらちらと布の間から見えます。一際大きな歓声が聞こえてくるとミーツエは少しだけ布を鼻で上げて外を窺いました。豪華な宝石を沢山身に着けたオリビエが満面の笑顔で王様に腕を引かれていました。

『あんなに宝石を付ける必要があるのかしら。』

ミーツエは不満を漏らします。確かにキラキラと宝石がうるさいくらい付いています。二人がこちらに向って来るとミーツエは身構えました。

『一か八かだわ。お父様はかわいそうだけど。』

もう何の策も無いミーツエは国民の目の前で魔女の正体を暴くしかないと思いました。

二人が祭壇から振り返り民に挨拶をしようとしたときミーツエは祭壇の裏から飛び出して思いっきりオリビエの顔を引っかきました。

「キヤアアアアアア！」

『やったわ！』

オリビエの悲鳴が教会に轟きました。

「猫だ！わしの大嫌いな猫がいるぞ！衛兵！何をしている！捕まえる！」

ところが王様はミーツエのことを猫だとはか思っていない。その声でオリビエは怒りの形相から一転して弱弱しく泣き叫びました。

「ああ、王様、私は昨晚悪いお告げを夢見したのです。呪われた白い猫が現れてこの国から追放された猫の復讐に王様の大事な姫の魂を攫って行くと！」

しくしくと泣きながらいうオリビエの指の間からミーツエにははっきりとオリビエの笑い顔が覗き見出来ました。

『な、なにを言い出すのよ！嘘つきー！』

ミーツエがいくら叫んでもニヤーニヤーとしか聞こえません。

「なんと！まさか！姫が？」

王様のその声で教会の最前列からボタンと人が倒れる音が聞こえました。それはオリビエが用意したミーツエの替え玉で人間のように見えても座っているだけのお人形です。

「なんて事だ！わたしのかわいいミーツエが！！その猫を捕まえる！」

すっかりオリビエの言う事を信じてしまった王様はミーツエを捕ま

えようと奔走します。

「王様、呪いを解くためにはその猫の目玉をくりぬいて姫に飲ませるのです！」

オリビエは続けて残酷な事を言いました。かわいそうなミーツエ、つかまりでもしたら目玉をくりぬかれてしまいます。

『お父様！私よ！私がミーツエなのよ！お願い！魔女の言う事なんて聞かないで！』

逃げながらもミーツエは王様に訴えましたが猫の鳴き声がますます王様の怒りに火を注いでしまいます。

「この猫め！ミーツエの魂を返せ！」

どんなにミーツエが願っても心の声は届きません。

とうとう教会の外の生垣の前で衛兵の一人に捕まりかけた時、祝杯用に準備された花火が打ちあがりました。

ドドン

一瞬みんなの目がそちらに向いた時、ミーツエはふわりと体を抱き上げられました。そのまま、ミーツエの目の前は一瞬にして暗闇に包まれました。そこは暖かく、とくんとくんと心地の良い音がしていました。

「しずかにしていてくれよ。」

その声には聞き覚えがありました。そう、今朝会った親切な少年で

す。

しばらくすると、わあわあとした騒がしい声が聞こえなくなりました。

「お前みたいに勇敢な猫を見たことないよ。」

少年の声が聞こえました。どうやら少年はミーツェがしたことを褒めてくれているようです。

ゆらゆらと一定のリズムでミーツェの体は揺れています。どうしてこんなに安心できるのかは不思議でしたが、混乱し疲れきってしまったミーツェはそのまどろみに体を預けました。

ねこと少年

次にミーツエが目を覚ましたのは薄明かりの中でした。どうやらバスケットに入れられているようで鍵がかかっていて出られません。

『もしかしてつかまってしまったのかしら、私。』

カリカリと爪でバスケットを引っかいてみましたが開きそうもありません。しばらくすると外から声が聞こえてきました。

「通行証を見せるんだ。おっと、鞆は全部開けて見せるんだぞ。」

どうやら外では検問が行なわれているようです。王様がミーツエの敵の白い猫を探しているとすれば当然のことでしょう。

「おい、そのバスケットも開ける！」

ミーツエの入っているバスケットも当然開けるように言われたようです。

「これは私のお弁当を包んでいた布しか入っていませんので……。」

少年はバスケットを開けないように頑張ってくれているようです。

『どうしよう。見つかったら親切な掃除係の人まで罰を受けるわ。』

籠が揺れてミーツエも揺れます。

「ダメだ、全部開ける！」

役人は無理やり少年から籠を取り上げました。中のミーツエは必死に布に捕まって息を殺していました。

「ふん。もったいぶりやがって。」

バスケットを開けた役人は小さな猫が布の下に隠れている事には気付かなかったようです。再び閉じられたバスケットが少年の歩幅に合わせて揺れました。

「お前はなんて賢い猫なんだろうね。」

小高い丘に着いた少年はバスケットを空けてミーツエを外に出しました。ミーツエは少年に頬擦りされてしまいます。

『貴方は異国の人かしら……。肌の色が少し違うし、何と云っても猫がこんなに好きなのなもの。』

少年に愛情たっぷりに見つめられ、大事に抱えられては悪い気はしません。

それから少年にミルクを与えられました。しばらくすると草むらからカサカサと人が出てきました。

「ギル様！」

男の人が少年に声をかけました。ミーツエは飛び上がって少年の後ろに隠れます。

「ああ。怖がらなくっていいよ。俺の仲間だから。」

少年はミーツエを腕に抱き上げました。ミーツエは不安そうに少年を見上げました。

「その猫は？もしかや今国中で血眼になって探されている…。」

「そつだよ。あの猫。勇敢な子だよ。」

「今すぐ手放された方が無難です。こんなことで見つかったら今までの苦労は水の泡です。」

「あの魔女と戦った猫を見殺しには出来ないさ。見つかったら目をくりぬかれて殺されてしまう。」

その言葉でミーツエの体はびくりと震えました。

『あのまま捕まっていたらお父様に憎まれて殺されていたでしょうね。』

そしてオリビエは高々に笑ったに違いありません。ミーツエは悲しい気持ちになりました。

縮こまったミーツエを抱き上げて少年はまたミーツエの鼻の頭にちゅっとキスをします。

「大丈夫。逃がしてやるから。」

優しい声で少年は言いました。

『鼻にキスされるのは慣れないけど、仕方ないわ。私は今猫なんだし。2度も助けてくれてありがとう。』

ミーツエは抵抗する事を諦めて少年の膝の上で丸くなりました。

「ギル様が猫好きだなんて知りませんでしたよ。」

「ふふ。どうしてかな。この猫は特別なんだ。こんな可愛い猫見たことないからかな。」

「確かに。真っ白で素晴らしいブルーの瞳をしていますね。」

少年と同じような浅黒い肌を持った男がミーツエに手を伸ばしてきました。ビククリしてミーツエは跳ねて逃げました。

「おやおや、相思相愛ですな。私には触らせてくれないらしい。」

「よしよし。ラルフになんかに触らすんじゃないぞ。俺が可愛がつてやるからな。」

「ちょっとぐらい良いじゃ有りませんか。」

「冗談だよ。でも、怪我をしているんだ。今はそつとしてやってくれ。」

「随分とお優しいんですね……猫には。」

「うるさい。」

バスケットの布の上に戻されたミーツエは丸まって耳だけ立てていました。

「フルパップ行きの船のチケットは手に入れたのか？」

「抜かりなく。あと半時で出港です。」

「わかった。」

どうやら二人は国を離れるようです。ミーツエは迷いました。このまま国に留まるかどうか。でも人間に戻れないままこの国に留まれば見つかり次第殺されてしまいます。

『フルパップはお母様のご実家。それに、お兄様がいるから……。』

決心したミーツエは少年に付いて行くことにしましたが、本当はそれしか手段はありませんでした。

ミーツエは心にも体にも傷を負っていてバスケットの布の上でもう目を瞑る事しか出来なかったのですから。

祖国を離れて

それからミーツェは少年とともに船に乗りました。

弱っていたミーツェは5日間シートの上で眠り、少年は甲斐甲斐しくミーツェの世話をしました。

「骨は折れてなかったようだ。少し元気になってきた。」

ミーツェの体を撫ぜながら少年が言いました。滑らかなその毛皮は高価はビロードのようです。

「ギル様がこんなにお優しくかったなんて……。うつつ。」

「いちいち、うるさいな。泣くな、ラルフ。」

「その優しさを淑女の皆様に分けてあげられませんかね。」

「ラルフ！」

「……すいません。」

従者らしき男を少年が睨みました。どうやらこの掃除係は良い家の出のようです。城に仕えるのは身元のしっかりした貴族の者と決まっています。階級が高くても兄弟が多ければ掃除係などに回されることは珍しい事ではありません。

『ベットメーカーキングのサラは12人兄弟の10番目だったかしら。きっと10人以上は上に居るのでしょね。』

ミーツエが一人で納得していると少年から提案がありました。

「お前にも名前が必要だね。そうだなあ。」

『猫にも名前が必要よね。私はあなたのこと今日からギルって呼ぶわ。』

どんな名前を付けてくれるのでしょうか。ミーツエはわくわくして耳を動かしました。それを見たギルは

「ミミミ。」

『えっ。』

「ミミミはどつだい？可愛いじゃないか。」

ミーツエはびくりとしました。小さいころはみんなミーツエのことを「ミミミ」と愛称で呼んでいたからです。

『ビックリしたわ。でも、わかりやすくていいわね。』

その日からギルはミミミをいっそう可愛がりました。

動けるようになってから夜バスケットから抜け出したミーツエは甲板に上がると船尾から祖国を眺めました。

『お父様の怖い顔……。国はどうなってしまうのかしら。』

その方向にもう陸地はとっくに見えません。月明かりが波をゆらゆ

らと浮び上げています。王様と国のことを考えるとミーツエは悲しくなりました。

『きつと人間に戻って帰るわ。あの魔女にいいようにされてたまるものですか。』

なけなしの気力を搾り出して声に出すものの、ミーツエの小さな声は塩風がさらって行きました。

+++++

「ミミ、バスケットに戻って。フルパップに着いたよ。」

朝食が終わったミーツエにギルはバスケットに戻るように言いました。外がざわざわしています。

『とつても良くしてくれてありがとう。着いたら私はお兄様のところへ行くわ。ギルにお礼をしたいけど、今私は猫だし……。』

意を決したミーツエはギルの頬にキスをしました。ミーツエの精一杯の感謝の気持ちです。ところがギルは

「ミミ、お前からキスしてくれるの？ああ、なんて可愛いんだ。世の中にこんな可愛いものがあつたなんて！ラルフには内緒だよ？俺がお前に首ったけなのは！」

そういつてミーツエを高々と抱き上げてキスの雨を降らします。

『ちよ、ちよっと！駄目！ねえ！く、唇はだめよ！そ、そんな！イヤ~~~~！』

ミーツエには気の毒ですがギルがキスを止める事はありませんでした。ちゅっちゅと音を鳴らしながら時折頬ずりまでもしてきます。

『私は猫、猫、猫……猫なのよ。……だから、今はファーストキスじゃない……。な、無し！無しなんだからあ！うっ。』

しばらくの間ミーツエは壁に向って咳いていました。

船が港に着くと今度の検問は簡単なものでミーツエはバスケットの中で安心して船から下りました。

バスケットの外からはギルの声が聞こえます。

「セルスロイにはすぐに会えるのか？」

「明日。例の場所で。」

二人は囁くような声で言いましたがバスケットの中のミーツエにはしっかりと聞こえました。しかもその名前が出たことでミーツエは驚きました。

『どっつしてギルが。』

ミーツエは港に下りたらギルと別れるつもりでした。その、名前を聞くまでは。

『セルーお兄様の名前を?』

疑問に思いながらミーツエはその人物を確かめることにしました。

従者付きの掃除係

『……同じ名前なだけかもしれない。でも、掃除係のギルが従者を連れてフルハツプに行くのも考えたらおかしい。…もしかしたら。』

よくよく観察すると掃除係にしてはギルの手は剣だこがあります。その晩、強引なギルの手によって同じベットに寝かされたミーツエはギルが寝息を立てたのを確認してからその腕からすり抜けました。ミーツエは考えます。

『お兄様が国を案じて誰かに調べさせていたとしたら……。』

ミーツエが「お兄様」と呼ぶ人物、セルスロイとはミーツエより8つ年上で天童と呼ばれ育った聡明な人物です。20歳で結婚した王が13年経ってもミーツエの母親と子供が出来なかったために近しい貴族から優秀な子供を養子にしたのです。でも、そのわずか2年後にミーツエが産まれてしまいました。女の子だった事もあって色々と憶測が飛び交いましたがミーツエ自身はお兄様と慕って育ちました。王もそのまま後継者として育てていましたが、20歳の時、セルスロイは聖職者になると言い出し、この隣国に神官として籍を置いたのです。

『ギルがお兄様の命令で動いていたとすれば……。』

そうであれば十分納得がいきます。ともあれ、明日になればミーツエの兄かどうかわかることです。ミーツエは眠っているギルを見つめました。

『無邪気に寝てる。ふふ。』

端正な顔立ちです。片方は義眼ですが、もう片方の目は吸い込まれそうな深い緑色でまるで宝石のようでした。普段はつんけんしているのにミーツエと二人になると途端に緩んだ顔になってミーツエを抱きしめたり、キスしたりしました。

『この、柔らかい唇が……。』

額に、頬に、そして唇に降ってくるのです。

『なに、私、しっかりするのよ！ほ、ほんと、ぶ、無礼なんだから！……でも、猫が好きなんだわ。ものすごく。』

赤面しながらミーツエは不思議な気持ちになりました。もう一度キスをしたくなるような気持ちに。

「ん〜。」

そのとき、ギルが寝返りを打ちました。はっと我に帰ったミーツエは飛び上がりました。バスケットに戻るつもりで枕元から離れようとしたとき……

『きゃあ！』

少しだけ目を開けたギルは腕を伸ばしてミーツエを再び腕に抱え込みます。

『え、だから、ねえ！は、離して……。』

ミーツエはもがきましたがギルは離してくれそうもありません。諦

めたミーツエはギルの腕の中、眠れない夜を過ごしました。

「ミミ。俺はこれから用事があるからここで待ってるんだ。」

早朝、ギルは丸くなって寝ていたミーツエにそっぴいしました。

『あ、あなたは朝からご機嫌さんね……。』

恨めしく思うミーツエからは皮肉の言葉が。でもミーツエは猫ですからギルにはそんな恨み言わかりません。

「必ず帰ってくるから、待っているんだよ。」

ちよこんとベットの上で座り直したミーツエはギルの顔を見上げました。

ギルは当然の様にミーツエにキスをしようとしたがミーツエにプイと避けられます。

『も、もう駄目なんだから！断固拒否！』

するとギルは心底悲しそうにミーツエを見ました。

「ミミ。必ず迎えにくるから。拗ねないでくれよ。」

『……………』

恨めしく思いながらミーツエは仕方ないとギルの頬にキスをしてあとはベットで丸まりました。

角をまがる二人をミーツエは塀の上から追っていました。

『こうしていると猫の姿って便利だわ。』

自分が猫になってからは随分猫が可愛く思えます。

『お父様がどうしてもあんなに毛嫌いするかわからないわ。魔女を退治したらもう「ねずみ天国」なんて言わせないわ。ふふふ……ふふふふふ。』

寝不足からかミーツエから不気味な笑いが漏れました。

『あ、古い教会に入るわ。』

教会……。ますますセルスロイの可能性が高まります。ミーツエは窓の隙間からするりと中に入ると祭壇の傍で話をする3人を見つけました。

『やっぱり……。』

薄い水色にも見える美しい銀髪を後ろに結わえ、今は黒の普段着の聖衣を身に纏っています。香り立つ美貌の持ち主と国で女性にも評

判の自慢のミーツェの兄でした。

『お兄様でもあんな顔するのね。』

ギルの話を聞くセルスロイは触れたら切れてしまうのではないかと思っくらい冷たい表情です。ミーツェは優しい兄の顔しか知りません。

『もっと話が聞けるところは無いかしら……。』

話の内容が聞こえないのでミーツェは周りを見渡しました。するとキラリと光るものが目に映ります。

『……………あれは？』

それが何か判ったとき、ミーツェの体が考えるよりも先に動きました。

『危ない！』

驚いたセルスロイに突然、猫が思い切り突進してきました。

「ね、猫!？」

セルスロイが慌てて声を出しました。

そこには

腕に矢が刺さった猫が足元に転がっていました。

セルスロイの宝石

『猫にされてからは怪我が耐えないわ……。』

ミーツエの腕から激痛が走ります。

すぐに祭壇の裏に隠れたセルスロイは無事の様子です。

「ミミミ！」

ギルはビククリしてミーツエを見ました。が、犯人らしき男が逃げるも見えませぬ。

「セルスロイ！その猫をたのむ！」

ギルはその場を離れて犯人を追いかけていきました。

『ああ。お兄様が無事でよかったです。』

ミーツエの国は「ねずみ天国」といわれる国ですから国から出ないと猫と接する事はありません。でも生まれも育ちも「ねずみ天国」のセルスロイは躊躇いもせず、ミーツエを抱き上げてくれました。

『やっぱり、セルーお兄様は優しい。』

ミーツエを怒鳴った父親の顔が過ぎるとミーツエの心は痛みました。

「お前は私を助けてくれたんだね？痛いだろうけど、少し我慢をしておくれ。」

『……………!!』

セルスロイはミーツエの腕から矢を抜きました。そしてその腕に口をつける、と強く吸い上げました。

『い、痛い！お兄様！！痛い！』

ミーツエは痛みに叫びましたが聞こえていないかのように冷静にセルスロイは何度も黒い血の塊を床に吐くと素早くハンカチを出して腕に巻いて止血してくれました。

「毒を塗っていたか……。どうやら今回の件には何人か貴族も絡んでいるらしいな。」

セルスロイもミーツエも王家の人間です。幼いころから様々な毒には耐性をつけて育てられています。セルスロイには毒の味もわかるのでしよう。

「お前は私の大事な宝石に似ている……………」

セルスロイが以前のように優しくミーツエに微笑みながら頭を撫でてきました。体の大きさからなのか、少し入った毒が回ってきたミーツエは意識が朦朧となってきました。

『お兄様が大切にしている宝石って何かしら……………』

そう考えながらミーツエはセルスロイに抱かれるまま眠ってしまいました。

「逃げられた。ここの地理に詳しいらしい。」

ギルは帰ってくると思っ先にセルスロイからミーツエを奪い取りました。

「この猫は貴方の猫なのですか？」

「ああ。俺の猫だ。宿に置いてきたのだが、寂しくなっついてきたんだろう。」

「良い猫ですね。」

「ああ。勇敢だろう？あの魔女にも立ち向かったんだ。すごい猫さ。」

「……譲っていただけませんか？私の大事な人に似ているのです。」

「駄目だ。」

「ははは。よほどのお気に入りなのですね。大の女嫌いでいらっしやるという噂の君は大の猫好きだったらしい。」

「ミミは特別なのさ。人間だったらすぐにでも結婚を申し込みたいくらいだ。」

「……そうですか。その猫はミミというのですか。名前までそっくりだとは……。」

一呼吸置いてからセルスロイはミーツエを見ながらそういいました。今はギルの腕の中で白い猫が眠っています。

「そんなことより、忠告はしたんだが、王はオリビエと結婚した。今すぐキジロに戻って策を立てたほうがいいんじゃないか？」

「今は何を言っても王は聞く耳持たないでしょう。下手するとオリビエにすべてを牛耳られてしまう。私がかここにいる限りは私の支配下の者には手は出せないでしょう。心配なのは……王女いもつとのことです。あの子は少々行動力がありすぎる。」

「俺が見ていたときは大人しくしていたが……。」

ギルは腕の中の白猫を見てから言葉を濁しました。義妹に異常なまでの執着のあるセルスロイがオリビエの話を鵜呑みにして猫を殺してしまうかもしれないと思ったからです。ギルは関心のないキジロ国のミーツエ姫よりも勇敢な腕の中で眠る白猫のミミの方が大切に思えたのです。

「…キジロのことは貴方とは関係の無い事ですね。つい私事をこぼしてしまいました。すいません。貴方に頼まれて探していた雪の魔女ですが、カナルトの迷いの森にいますという情報が入りました。」

「カナルトか。雪の魔女だけあって随分寒いところにいるな。」

「ご検討を祈ります。」

「そっちなこそ。キジロがユーシリアのようにならんようにな。」

マントをひるがえしてギルはセルスロイに手を上げました。そして、そのまま、宿へと帰って行きました。

腕の中にはミーツェ。何も知らずに眠っています。

「教えて差し上げなくて良かったのですか？ギル様」

「教えたらミミが危ない。」

「……まあ。噂では王女の伴侶となるために国を出て神職を選んだといわれていますからね。王女の事を話せば間違いなくその猫は引き渡さなければならなかったでしょうけど。でも、敵に回せばやっかいですよ？いずれ話はセルスロイ殿の所へと行くでしょうから。」

「その時はその時さ。」

心配する従者の話を収めるようにギルはそれから口を閉ざしました。宿に帰ってバスケットにミーツェを寝かすとギルはその柔らかい頭を撫ぜました。

セルスロイが言う「宝石」はすなわち彼の愛する一人の娘。

彼は彼女を手に入れる為に国から出て聖職者の道を選んだのです。

美しい水色の瞳を持つ少女。彼女こそがセルスロイの希望の光。

そのことを知らないミーツェは痛みを耐えながらバスケットの中で眠っていました。

セルスロイの宝石（後書き）

ミーツエ怪我ばかり……。。

カナルトの迷いの森

ミーツエが次に目覚めた時そこはカタカタと揺れる馬車の中でした。

『随分眠ってしまったのかしら。お兄様は……？』

目覚めたミーツエに気付いたギルがミーツエを覗き込みます。

「ミミ。やっと目が覚めたんだな。2日も眠っていたんだ。心配したんだぞ。」

そついうとミーツエの背中をそつと撫ぜました。

『2日も……。毒に慣れていると思っていたけど、体が小さいと駄目なのかもしれないわね。』

ぶるりとミーツエが体を震わせました。なんだか寒くなっています。するとギルは自分が被っていたマントの中にミーツエを入れ、膝の上に乗せました。

「寒いだろう。雪山に向っているからな。怪我のお前には辛いかもしれないが置いていくよりマシだろう?」

『雪山……。お兄様と話がしたかったのだけど……。』

怪我をしている上に遠くまで連れられてきているのです。ここはギルに付いていくしかないようです。

『何をしに行くのかしら。住まいがこちらとか?様子を見るしかない

さそつね。』

仕方がないため息がでるものの、ミーツエはギルと一緒にいることが嫌だとは思いませんでした。腕の痛みは随分引いていましたがミーツエは『早く体を治すのが先決だわ。』ともうひと眠りしました。次にミーツエが揺り起こされたのは1時間ほど経ってからでした。

「ミミ！あれが カナルトのウル山だ！見てごらん美しいから。」

ギルの弾む声が聞こえたかと思うとミーツエは馬車の窓のところに顔を出すように抱きかかえられていました。

『カナルト。たしか、迷いの森があるという……すごく、綺麗な山。』

目の前には青銀色に輝くウル山が見えてきました。「鋭い三角錐が胸をすくような美しい姿」世界一美しい神秘の山というのも頷けませ。興奮しながら窓の外を見るギルはミーツエに頬刷りしてきます。いつもなら離れようとするミーツエですが、美しい山に見入ってギルの好きにさせていました。御者の隣に座っていた彼の従者は振り返りながら主人のデレデレ具合を見て「新婚旅行のようだ……猫とだけど。」とこぼしていました。

馬車が止まるとギルたちは小さな町の宿に入りました。ギルは部屋

で一番暖かい場所……暖炉の傍にミーツエの入ったバスケットを置きました。

「流石に寒いな。防寒用の服を揃えたら明日、迷いの森に出発しよう。」

「雪の魔女に会えるでしょうか。」

「……会えなくては困る。」

それからギルたちは昼食と買い物に出て行ってしまいました。ミーツエにも食事と暖かいミルクが置かれています。

『ああ。元気だったらお買い物ものについて行きたかったわ。』

ミーツエからは年頃の娘らしい感想がこぼれました。もしミーツエが猫の姿でなかったらすぐさま町娘の格好で買い物に行ったに違いません。なにしろ、好奇心旺盛なミーツエはキジロ国にいたときから時々城下に遊びに出ていたのですから。

『たしか、ギルは雪の魔女って言ったわね。』

ミーツエは「魔女」を調べた時のことを思い出しました。もちろんその時はオリビエを倒すために調べたのです。

『文献には……黒を司るものその身に破れ、白を司るものその身を捧げるとあったかしら。……よくわからなかったけれど。オリビエは「黒」かな？雪っていうなら雪の魔女は「白」かしら？』

そんなことを考えながら食事を終えたミーツエが窓の外を見ると従

者を連れてギルがもう宿に戻ってきたようでした。

「ミミ！帰ったよ！寂しくなかったかい？」

ドアを開けたギルは一目散に抱き上げて頬刷りします。

『貴方の猫好きも困ったものね』

苦笑しながらミーツェも好きにさせておきました。

「お前にリボンを買ってきたんだ。野良猫と間違えてもされたら大変だからね。」

そういうとギルはビロードの黒のリボンをミーツェの首に結わえめました。こんな上等なりボンを猫に結ぶなんてギルはよほどミーツェが気に入ったのでしょう。

『あなたの髪と同じ色ね。悪くないわ。ありがとう。』

美しいリボンを結ばれた白い猫はリボンに負けないほど美しく見えました。

彼の従者はまたもや「これが猫でなかったら……。」「とその様子を見守っていました。

次の朝、ギルは懐にミーツエを入れて迷いの森にでかけました。だんだんと雪深くなる森の中は光が雪に反射して辺りをきらきらと輝かせていました。ひよっこり顔をだしたミーツエは外を見て感嘆の声を上げました。樹氷は風にキラキラとその雫で応え、その奥ではウル山が神々しく太陽を背にその姿を見せています。

『まるで銀色の絹のよう……。雪ってこんなに美しいのね！』

足跡を付けたい衝動に駆られながらミーツエはギルの懐から飛び出さんばかりにキョロキョロしました。

「こら、興奮するな。落ちてしまうぞ？」

ギルが優しく言いますがミーツエはその美しい雪を触りたくて仕方ありません。

「おっとー！」

その声とともにミーツエが雪の上に転がりました。

『冷たい！でも！フカフカね！』

面白いように足跡がつく白い雪の上をミーツエは駆け回りました。

「……………まったく。」

ギルはその様子を見てそういいましたが困っているようには見えません。あんまり猫が喜んでいるのが可愛くて仕方ないようです。

とはいえ白い猫は大地と同化して判り難くなるので黒いリボンだけ

が頼りです。

「ミミミ！この辺りはゴブリンが多いんだ。もう帰っておいで！」

そうギルが叫んだ時、ギルの頭上の木の上から黒いものが降ってきました。

ねごとゴブリン

「わああああ!!」

ギルが突然大きな声で叫んだのでミーツエは足を止めて振り返りました。

「な、何あれ!?!」

ギルの顔面にコールトールのような色をした気味の悪いものがくっついていきます。

「シワシワの汚れたおじいちゃんのお人形みたい……」

お城暮らしのミーツエが森に住むゴブリンのことなんて知るわけもありません。ゴブリンは体長30センチくらいの頭でっかちの妖精で意地悪いのが特徴だとも言われています。大抵は森に住んでいて旅人などに意地悪をしてからかたりします。寂れた町なんかにもたまには現れますが、どちらにしてもミーツエがお城で暮らしていたら一生会わなくてもおかしくない存在です。

「っこの!!」

ギルは顔面に張り付いたゴブリンを剥がそうとしましたがなかなか取れないようでもがいていました。ラルフも剣を構えたものの、主人の顔に張り付いたゴブリンには振るえるわけにもいきません。

「今取ってあげる!!」

走って戻ってきたミーツェはギルの体に駆け上がるとゴブリンめがけて爪を立てました。

『ギルから離れなさああああい！』

『ぎゃああああ！何しやがる！』

ゴブリンはポトリとギルの足元に落ちるとミーツェに引っかかれた背中を摩り上げました。

『この女！』

『え……。』

猫の姿で女と罵られるとは思わなかったミーツェはビククリしてゴブリンを見ました。

『ふん！アタイにはお見通しさ！あんたも呪いをかけられたくちだろっ。』

『そ、そうだけど……。わ、わかるの！？』

『同じ人間に呪われた人間同士は姿を変えられても言葉が通じるんだよ。あ、いてて！何しやがるんだ！このクソ男！』

ギルの足元に落ちたゴブリンはラルフによって縛り上げられてしまいました。そのまま綱の端をもったラルフがゴブリンを吊り上げた状態でぶらぶらとぶら下がっています。

「大丈夫ですか？ギル様。」

「大丈夫だ。しかし、こいつ、目をえぐるうとしたぞ。」

「！なんてことを！」

ラルフは縛ったままのゴブリンを剣の鞘で殴りました。

『ぎゃっ！』

ゴブリンは声を上げました。一部始終を見ていたミーツェは痛そうに顔をゆがめるゴブリンに声をかけました。

『もしかして貴方、オリビエに目玉を食べれば元に戻るって言われたんじゃないかしら？』

『何で知ってる？緑だ深緑の目を食べればアタイは戻れるんだ！』

『……………』

『なにか言いたそうだな？』

『多分。それは嘘だと思うわ。オリビエは嘘つきだもの。それに、呪いを解ける方法を教えるなんてありえないと思わない？』

『……………。い、痛い！痛い！』

会話もそこそこにラルフによってゴブリンは締め上げられました。

「ギル様、このゴブリンをどうしますか？」

「……捨てておけ。」

ギルは興味がないのかミーツエをひょいと抱き上げてマントに入れるとパイと背を向けてしまいました。ラルフは主人の言う通りにゴブリンを締め上げたまま木の下に転がしました。

『くそ！ほどこきやがれ！』

ゴブリンが悪態をついています。ギルたちにはギイギイ聞こえるだけです。

『ギル、待って！彼女と話をさせて！』

ミーツエは暴れてギルの胸から飛び出しました。ギルは自分を助けてくれた猫がどうしてゴブリンのところに戻るのか不思議顔で見えていました。

『彼女も連れて行って。ギル。お願い。話がしたいの。』

もちろん、ミーツエが何を言っているのかはギルにはわかりませんが、でも彼の愛しい猫が小汚いゴブリンの横でかわいらしく首を傾けて前足でおねだりしているのはわかります。

「ミミはいったいどうしたんだろう？」

「ゴブリンを見捨てるのは止めて欲しいみたいです。」

「ミミには俺が酷い事をしているように見えるのかな？」

「オオ。どついでしょつか？」

「……。」

「ギル様、行きましょう。」

ラルフはそういいましたが彼の主人はしばらく考えてから

「ラルフ。そのゴブリンも連れて行こう。ただし、縛ったままだ。」

といました。思い切りしかめ面になった彼の従者は嫌そうに縄の端を持つとゴブリンを持ち上げて主人の後に付いていきました。それを見届けた猫は主人の隣をうれしそうに歩きます。

「……まったく。猫に骨抜きとは。」

従者は深くため息をつきました。

それから森の中を歩き回りましたがギルたちは雪の魔女を見つけることは出来ませんでした。体が冷え切ってきたのでラルフが焚き火をはじめて少しの間休憩する事になりました。二人が地図を見ながら話している際にミーツェはゴブリンの元に向いました。

『「いったいどういっつもりだい？これでアタイを助けたっもりかい？」』

焚き火から少しはなれたところでゴブリンは転がっていました。

『そんなこと思ってないわ。貴方と話したかったのよ。同じ呪いがかけられた者同士のね。』

『……あんに話せることはないよ。』

『……私、貴方に嫌われちゃったかしら。背中引つかいたし……。』

『まあ、痛かったけど、そうじゃない。アタイはオリビエが言った最後の言葉しか覚えてないのさ。「深緑の目玉をくり貫いて飲めば元に戻る」って言葉しか。記憶がないんだ。さっぱりね。警備隊の奴らに街中で見つかって捕獲されてから森に放されたんだ。』

『そうだったの。私は王女なの。オリビエがお父様に上手く取り入って王妃になったわ。正体を暴こうとしてこの有様よ。』

『へえ。王女様が。でも猫なんてかわいいじゃないか。』

『お父様が国中から追放するくらい猫嫌いなのよ。オリビエの性格の悪さには頭が下がるわ。』

『それならアタイはきつとすっごい美女だな。こんなゴブリンの姿にするくらいなんだから。』

『きつとそうね。』

ふたりはフフフと笑いました。

『その縄、きつくない？待ってて。緩めてあげる。』

ミーツェはゴブリンの後ろに回って縄を緩めようとしたがラルフが随分固く絞めたようでびくともしません。

『駄目だわ。ごめんなさい。』

申し訳なさそうにミーツェが言うとゴブリンは目を細めました。

『あんたはいい子だね。わかってる？あんた、アタイのこと初めから「彼女」とか「貴方」って言ってる。こんな小汚いボロゾーキンみたいなのに。』

『そうだったかしら。でも、貴方は貴方よ。そんなことより、聞きたかったのだけど、どうして同じ人からの呪いを受けたもの同士が話せるって知ってるの？他にも居るってこと？』

『ああ。そのことは雪の魔女に聞いたから。』

『え、雪の魔女！？』

『うん。そう。それがどうかした？』

『だって、ギルたちは「雪の魔女」を探してこの森に来たんだもの。貴方は雪の魔女の居場所を知っているの？』

『……。知ってるけど、知らない。』

ミーツェの質問にそう答えたゴブリンは空を見上げました。

ねじとコブリン（後書き）

ミーツエの必殺技は「みだれ引つかき」。

雪の魔女

『雪の魔女は雪が降る日にしか現れないんだ。』

『ふうん。だから雪の魔女なの？』

『いや。雪の魔女も呪いをかけられているんだよ。』

『それって、もしかして……。』

ゴブリンは頷きました。

『そう。アタイたちと同じオリビエにね……。』

「ミミミ！なにをしてるんだ。」

もっとゴブリンと話がしたかったミーツエでしたがギルによってふわりと体を持ち上げられました。

『ギル、せめて彼女をもう少し火の傍まで寄せて上げれないかしら。』

言っても仕方ないとミーツエはギルを見上げましたが意外なことにギルはゴブリンの縄を持ってゴブリンを火の傍へとやりました。

「森の住人ゴブリン。どういう理由で俺を狙ったかは知らないがこの森はお前たちの森。入り込んだ俺が攻撃されても仕方ない事。しかし俺たちが森を出るまでは縄は解けない。」

『あのね！ギルは雪の魔女を探してるの！だから雪の魔女が見つかったらあなたの縄を解いてくれるんじゃないかしら？』

『お嬢ちゃん、上手く会えたって言葉は通じないんだ。それより本当にこいつの目玉を飲んでも呪いが解けないか確かめた方が良くと思わないか？』

『だ、駄目よ！それでなくてもギルは片目しかないのよ。お願い。それだけは止めて。』

ミーツェの言葉を聞きながらゴブリンはギルを見つけていました。

『確かに、両方なくなると気の毒だな。……こいつ……何処か見たことがあるような……。』

ゴブリンはギルの顔を覗きました。覗き込まれたギルもゴブリンを見つめました。

「あと半刻で出発する……それまでお前も温まればいい。」

そういうとギルはミーツェを懐に入れました。

「ギル様。雲行きが怪しくなってきました。宿へ戻りましょう。」

「なんとか雪の魔女を見つけないと……母上が……。」

「もう日も落ちます。今日はもう……。」

ギルの気落ちした声を聞いてミーツェは胸が締め付けられる気がしました。

『ギルはお母様の為に雪の魔女を探しているのかしら……。』

「もう少しだけ探そう。」

「ギル様……駄目です。」

ラルフはきっぱりと言うと彼の前で膝を着きました。

「……わかった。ラルフ。顔を上げていい。」

自分の身を案じた従者にそう声をかけるとギルは森の出口へと足を向けました。

『！雪の魔女には雪が降らないと会えないわ。今帰っても会えない。ギル！帰っちゃだめよ！』

ミーツェはギルの懐から飛び出して森の奥へとギルを誘導しました。

「……」

「ギル様！追ってはいけません！お願いします。私の言う事を聞いてください。」

「ラルフ……。」

ラルフはギルの前へ出ると再び膝を着いて懇願しました。その様子と森の奥へと消えていった子猫を見比べてギルは拳を震わせましたが……

「……わかった。」

そういつてゴブリンの縄を切ると何度も振り返りながら森を出て行きました。

『……ギルはついて来なかったわね。でも、仕方ないわ。私は猫なんだもの。』

ミーツエはてつきりギルが着いてきてくれると思っていたのですがっかりしました。その様子をみてゴブリンはニヤニヤします。

『お嬢ちゃんはアイツが好きなんだ？』

『え！？あ、ありえないわ！私は猫なんだもの！』

『アイツにはそうかもしれないけどお嬢ちゃんにとっては違っただろ？ふ、ふん。』

『し、しらない！』

プイとゴブリンにそっぽを向いたミーツエの鼻の頭に何かがふわりと落ちてきました。

『雪が……。』

『森は寒くなるよ。おいでお嬢ちゃん。夜を越せる場所に案内してやるよ。』

『ありがとう。貴方は優しいのね。』

ミーツエの言葉に真っ赤になったゴブリンは鼻の頭を三回かきました。ゴブリンは何も言いませんでしたが、ミーツエが後を追いやすいようにゆっくりと歩いてくれました。

『ね、誰か、歌っていない？』

暗闇の向こう側から僅かに声が聞こえてきたミーツエは足を止めました。雪はもう5センチほど積もっています。

『雪の魔女だ。』

いつの間にかミーツエの隣に来ていたゴブリンは空を見上げました。ミーツエが釣られて見上げたところから金色に輝く雪が落ちてきました。しばらくその美しさに見入っていると輝く雪の粒がクルクルとまわり出してその中央から美しい金髪の女の人が現れました。寂しげに歌っていた女の人はミーツエたちを見ると微笑んでゆっくりと近づいてきました。

雪の魔女とその呪い

『あ、貴方が雪の魔女なの？』

ミーツエが質問すると雪の魔女は美しい顔をミーツエに向けました。

『そうですよ。』

そう答えてくれましたが、それからしばらくは沈黙が続きました。

『無駄だよ、お嬢ちゃん。雪の魔女はいつもこうなんだ。前にアタ
イが会った時も自分から何にも話もしないし。』

『……そうなんだ。』

ミーツエは考え込みました。せつかく会えた雪の魔女と話をしたか
つたのにどうやらそれも難しそうです。でも、諦めるという選択は
ミーツエにはありません。

『貴方もオリビエの呪いがかかっているの？』

『そうです。』

『ギルという男の子が貴方を探していたのだけれどもしかして知り
合いなの？』

『いいえ。』

なんとか色々聞いてみるものの、雪の魔女は答えてはくれませんがゴブリンが言ったようにそれ以上は話をしようとしませんでした。ミーツエは頭をめぐらせましたが質問する内容も終いには出てきませんでした。そんな様子をゴブリンはあきれたように見ていました。

『だから、言つたら？お嬢ちゃん。そろそろ諦めて暖かいところに移動しなくっちゃ。』

その言葉でミーツエは焦りました。何か質問しなくてはせつかく会えた雪の魔女とお別れしなくてはなりません。

『どんな呪いなの？』

頭を捻った結果ミーツエは自分でも情けないような質問をしました。でもそう聞いたミーツエに雪の魔女は少しうれしそうに顔を輝かせました。

『雪の降っている時にしか出現できない呪いと質問にしか答えられない呪いです。』

『えっ！』

二人は驚いて顔を見合わせました。

+++++

『お嬢ちゃんが言ったようにオリビエはとんでもなく性悪だね。』

『そうよ。私が調べただけでも東の国が滅ぼされていたし、たくさんの行方不明者が出ていたもの。でも驚いたわ。二つも呪いをかけられていたのね。』

『きつと同じ魔女だから余計な事しゃべんないようにしたんだよ。』

ミーツエたちは三人(?)で輪を囲むようにして氷の長椅子に座っていました。雪の魔女は魔法で暖かい氷の部屋を作り吹雪から守ってくれました。中央には火がくべられて外からはキラキラと輝いて見えたに違いありません。ミーツエは雪の魔女の顔を覗きこむようにして尋ねました。

『……だとしたら色々知っているってことよね?雪の魔女、貴方はどこの国にいたの?』

『テルゼ国です。』

『テルゼ国ってこの近くの大国よね。確か鉱物の資源が豊富で軍事力も高いって聞いたわ。迷いの森のあるカナルトは誰の手にも入らない中立の土地だけど実質はテルゼが担っているし。貴方はテルゼで何をしていたの?』

『オ……リ……。古い友人を止めに……。』

『貴方はオリビエに関することも話せないのね?』

『はい。』

『貴方の呪いを解く方法はある?』

『いいえ。』

『じゃあ。アタイたちの呪いも解けないのかよ!』

『いいえ。』

黙って聞いていたゴブリンが溜まらず声を上げると思っていたものと違う答えが帰ってきました。ミーツェとゴブリンは顔を見合わせました。

『え……つとお。アタイたちの呪いの解ける方法教えてくれ』

『呪いは特定の心の負の想いを無くすと解けます。』

『「ふ」?なんだよ、それ?』

『多くは劣等感や罪悪感です。』

『!それを克服すれば解けるってことなの?』

『そうです。』

『どういうことだい?呪いは呪いじゃないのか?』

『呪いと「負」の感情はどう関係があるの?』

『呪いは一方的なものだからかける側にもダメージがあります。でも、その人の劣等感や罪悪感といった「負」の感情にくつつけることで少ない魔力で呪う事が出来ます。』

『……だったらオリビエは事前に私たちの心の弱い所を知っていて呪いをかけたのね。』

雪の魔女はミーツエを見て頷きました。

『そして……貴方の「負」の感情は消えそうもないってことね。』

再びのミーツエの問いかけに雪の魔女は寂しそうにもう一度頷きました。

一匹になった猫

朝日に照らされた雪がチカチカとミーツエの眠りを遮ってとうとうミーツエは目を覚ましました。

『雪が止んでるわ。』

空は美しい青空で昨夜の吹雪がウソのようです。

『とりあえずはギルのところへ行きましょう。』

ミーツエは隣で寄り添うように丸くなっていた茶色のシマ猫に声をかけました。

『もう朝か……。おはよう、お嬢ちゃん。』

雪の魔女は呪いを解くことは出来ないけれど、呪いをすり替えることはできると言いました。それを聞いたゴブリンはミーツエを見て自分も猫にしてくれと雪の魔女にお願いしたのです。

『そっちはもう違う道だよ。宿出る道はこっちだ。』

慌ててミーツエはシマ猫について行きます。迷いの森は数時間ごとにその地形を変えてしまい、ギルたちのように専用の地図を持っていないとなかなか森の奥へ行くことも森の外に出ることもできません。

『あなたがいてくれて本当に助かったわ。』

前を歩いてきたシマ猫はその声を聴いて少し立ち止まり、ほほを赤らめて三回鼻をかきました。

「ミミ！戻ってきたんだな！」

宿の外で会ったギルはミーツエの姿を確認すると飛び上がって喜びました。昨日彼があきらめた子猫が彼のところにまた帰ってきたのです。

「あの吹雪の中、よく生きて帰ってきましたね。」

ラルフも驚きながらミーツエを迎えてくれました。

「あれ!？」

ギルはミーツエの後ろにいるシマ猫を見て固まってしまいます。

「おい、やっぱりアタイ、猫に見えてないんじゃないか？」

「大丈夫よ。私には立派な茶色のシマの猫に見えるもの。ギルは無類の猫好きだからきつと一緒に世話してくれるわ！」

ミーツエはそうシマ猫を勇気づけましたがギルの眉間のしわはよる一方です。

「まさか、昨日ギル様から逃げたのはその猫のせいでは……。」「

ラルフがギルに問いかけましたがギルはまだ固まったままです。

『どうしたの？ギル？』

ミーツエがギルに近寄るとギルはガバリとミーツエを抱き上げました。

「ダ、ダメだ！！そんな小汚いシマ猫にミミはやらん！」

『！？』

抱き上げられたミーツエはギルが何を言っているのかわかりません。

「ギル様。こちらのシマ猫……その、メスのようです。」

「え……！？」

ラルフの声でギルは空気の抜けた風船のような声を出して……

『ふっつ。』

その様子を見ていたシマ猫はため息をつきました。

『だから、お嬢ちゃんはいつにとって特別なんだよ、フン、バカらしい。』

一緒に面倒を見てくれるものの、ギルの自分に対する態度とシマ猫に対する態度があまりに違うのでミーツェは目を白黒させてしまいます。

『でも……。私は猫なんだからやっぱりギルはちょっと変ね。』

その声を聞いたシマ猫はちらりとギルを見ました。

『確かに猫を恋人みたいに扱うのは変態の部類かもな。まあ、でもお嬢ちゃんは猫でもかわいいさ。きつと見る目があるんだろう。』

『そうかな……。』

恥ずかしくなって下を向いてしまったミーツェにギルの甘い声が聞こえてきました。

「ミミ。寒いだろう？膝の上においで。」

言うなりギルはミーツェを膝に乗せてしまいます。

「おっと、シマはバスケットの中だ。」

『フン、言われなくたって行くさ。』

シマ猫はいつの間にかギルに「シマ」と呼ばれていました。呼ぶ名前がなくて困っていたミーツェもこれ幸いと「シマさん」と呼ぶことにしました。なんとなく名乗り忘れてしまったミーツェも「シマ

さん」に「ミニ」と呼ばれていましたが幼少期の愛称だったので違和感がありません。

朝食が済むとギルたちはまた森に向かうことにしていました。雪が降らないことには雪の魔女に会えることはないのですがいつ雪が降るとはわかりません。

『もつと雪の魔女とお話ししたかったわ。また会えるかしら。今度こそギルに会わせてあげたい。』

そんな風にシマ猫に話したミーツェはシマ猫と一緒にギルたちが迷いの森へ行く準備をするのを眺めていました。

「お客様、お待ちください！テルゼの王宮よりお手紙が着きました！」

さあ、森へ出かけようとしたギルたちのところへ宿の主人が駆け寄ってきました。見ると外に早馬が着いています。早馬とは急ぎの手紙を届ける貴族の配達便です。宿の主人から手紙を預かったラルフは確認してからゴム印の付いた手紙の封を切ってギルに手渡ししました。

「……。ラルフ。雪の魔女探しは中断だ。父上が倒れたらしい。」

渋い顔をして手紙を読み終えたギルがそう言うとラルフは一瞬だけ

辛辣な顔をしましたが

「すぐ、戻る準備を致します。」

と、いって馬車を取りに馬小屋に向かっていきました。

ねごと王子

ギルが国に帰るといっているのでミーツェはどうしようかと思っ
ていま
したが

「ミミ。ついて来てくれるよな。」

とギルに言われてしまうと大人しくギルに抱かれて馬車に乗り込み
ました。ニヤーニヤーと訴えたシマ猫も無事に馬車に乗せてもら
います。

『ギルのお父様がもしもご病気ならギルがかわいそうだね。私に何
かできないかしら……。』

『お〜お〜。恋する乙女だね〜。』

シマ猫にからかわれて真っ赤になりながら俯いたミーツェがシマ猫
に『シマさんが一緒だと心強いわ。』
というシマ猫の方も真っ赤になってしまいました。

『どうせ記憶もないんだ。取り敢えずはミミについて行くな』

心強い仲間を得たミーツェはうれしくなりました。

辺りが暗くなつた頃馬車が止まりました。

「ミミ、着いたよ。」

ギルはバスケットを覗き込むとシマ猫と丸まって寝ていたミーツエを見て眉間にしわを寄せるとミーツエをそっと抱き上げて懐に入れました。

「ラルフ。シマはお前に任せる。後で部屋に運んでくれ。」

「あの……ミミは？」

「俺が連れて行く。」

ギルのマントの中に入れられてしまったミーツエは真っ暗です。

『どこについたのかしら？』

顔を出そうともがいてやっと外の空気を吸うとそこには初めて見る白髪交じりの太った男が立っていました。ギルの方に駆け寄って来たのか額には汗をかいています。ぎらぎらした身なりは上級貴族だと言わんばかり。

「フェリエ!! ロアノア!! ステラヅティ!! テルゼ!! アルギル様! よくお戻りになりました! お疲れでしょうからまずはあちらでお茶でも……。」

目の前の男は手を揉みながらミーツエのことなんか視界に入っていないようです。でもミーツエも彼のことなんかかまってられません。

『フェリエ!! ロアノア!?!』

その男が言った名前には覚えがありました。なんたって16の誕生日に真つ先にミーツエの父親が自分の釣書と肖像画を送った大国の王子の名前です。まったく関心のなかつたミーツエは長い名前さえおぼろげでしたが一国の姫なら皆懂れる縁談です。

『ギルはテルゼの王子だったの!?!』

仕草や持ち物などで気品を感じていたものの大国の王子だとはいくらミーツエでもわかりません。

「今、帰った。が、ゆっくりするつもりはない。父上を見舞うのが先だ。それともお前が呼び出したのには他に訳があるというのか?」

「……………い、いえ。」

ギルは男の横をスツと通り過ぎて王宮の奥へと迷いなく踏み出して行きました。

「アルギル……………戻ったのか。」

「父上。大丈夫なのですか?」

テルゼ国の王の寝所でお抱えの医師に囲まれた彼の父は口を開きました。同時に人払いをして息子を招き入れます。

「大したことはないのだ。眩暈がして倒れただけだ。アントンが騒いでこの有様だがな。」

息子に支えてもらいながらテルゼの国王は体を起こしました。

「アントンなら宮に戻って真つ先に会いましたよ。騒いだ割にはお茶に誘われましたが。」

「ふふ、奴はお前に帰ってきてもらって娘を娶ってほしいんだよ。」

「あの、ガチヨウみたいなの冗談じゃありませんよ。俺は当分結婚はごめんです。父上には元気でいてもらわないと。」

「キジロ国はどうだった？」

「……忠告はしたのですが、遅かったようで……オリビエは王妃に収まりました。」

「そうか。キジロには申し訳ないがオリビエはそこに留まるということだな。キジロが滅びる前になんとかあの女を仕留める方法を考えないと。」

「キジロにはセルスロイがついています。滅びることはないでしょう。」

「ああ。あの男か。確かにあの男ならばな。小国にはもったいない逸材だ……。そういえばキジロの姫を見たのか？美姫と有名だぞ。」

「大人しそうな姫でしたよ？遠目でしか見ていませんが。興味もありません。」

「はあ。お前の女嫌いは治らんな。」

「……わずらわしいのですよ、父上。母上のような人がいれば結婚も考えますがね。」

「ふん、レイラのようないい女は滅多におらんからな。」

「……雪の魔女はカナルトの迷いの森にいるらしいのです。」

「だとしたら灯台下暗しだな。何人が腕の立つものを回そう。」

「母上は眠ったままなのですな。」

「あの時、雪の魔女の忠告を聞き入れておればこんなことにはならなかったのだ。すべて……わしのせいだ。」

「父上、お気になさいますな。俺が必ず母上を元に戻して見せます。」

「アルギル……。」

黙って親子の会話を聞いていたミーツェは自分の名前が出てびっくりにして、少しがっかりしました。

『でも…女嫌いでは有名な王子だもの、ギルが小国の姫に興味を持つわけがないわ。きつと人間に戻ったら見向きもされないわね……。』

それでも、ミーツェはギルの役に立ちたいと思いました。

『今の会話だとギルのお母様は眠ったままなのね。お母様……か……』

母親……そう聞いてミーツエは悲しい過去が甦り鼻の奥がつんとしました。

ねごと王子（後書き）

ギルは王子様です（笑）王道ですよね。

ねこである幸せ

『もしも私の呪いが解ける方法があるとすればお母様が生き返ることしかないわ。だって私はお母様を殺してしまっただんだもの。』

王の部屋をギルと出たミーツエはギルの胸で揺られながらそう、つぶやきました。

ミーツエの母親はミーツエが3歳の時に亡くなっています。元々丈夫な体の人ではありませんでしたが医師が止めるのも聞かずにミーツエを出産したことで病床に臥せってしまいました。キジロ王は子が望めなくていいと貴族の中から優秀な子を自分の養子にしていました。しかし、今か今かと期待されていたのも事実。国民は王の子を期待します。中には「何のための王妃か」と不満の声を上げる者もいました。側室を、との声上がる中、子供を産まないことには針のムシロの上の生活だった王妃が無理をして出産を決意してもおかしくありません。

『無理をしてやっと生まれたら女の子なんて、お母様はがっかりしたでしょうね。』

ミーツエがどんなにダダをこねても母親は月に一度、数分しかミーツエに会ってはくれませんでした。抱きしめてもらった記憶もミーツエにはありません。

『私のせいで肩身が狭い思いをしていたんだもの、嫌われてもしかたないわ。……きつとオリビエもこのことを知っていたでしょうね。』

ふう、とため息をつくときミーツエはギルの胸に寄り添うようにしま

した。

まっすぐ部屋に戻らなかったギルはミーツエを中庭に連れて行きま
した。

ミーツエをマントから出すと再び胸の上のせて芝生の上にゴロン
と寝ころびます。

「ミミミ、気持ちいいだろ？俺の秘密の場所だ。」

いつからかギルに抱っこされることが当然のようになってミーツエ
はギルの胸の上でその鼓動を聞いていました。

「そうだ。これをやるよ。これは俺の猫だっていう印。外さないよ
うにな。」

少し起き上がるとギルはポケットの中から指輪を取り出しました。
スルスルとギルは黒いリボンに指輪を通してミーツエの首にリボン
を巻き直しました。そのままギルの指はミーツエの喉を鳴らすよう
に優しくなめます。

『ギル…私、貴方のことが好きだわ。』

少し泣きそうになったミーツエは指の動きに合わせてるよう目を細め
ました。

『猫でいる方が幸せだなんておかしなものね。』

それでもミーツエは人間に戻って父親と哀れなローランドを……そして大切な民を守らなければなりません。

『今だけはあなただけの猫でいさせてね。』

何も知らないギルはミーツエの鼻の頭にキスをして抱きしめてくれました。

「お前にだけ後で俺の母親に会わせてやるよ。」

ギルはそう言ってミーツエを抱え込むと目を閉じて眠ってしまいました。ミーツエはこの暖かさを忘れまいとギルに寄り添うと甘えるように体を預けました。

「母上、これが俺の大事な子猫。ミミだよ。」

嚴重に警護された扉を3枚も抜けるとその美しい天蓋の中で眠るギルの母親に会うことが出来ました。

『これが、ギルのお母様。ギルはお母様似なのね。』

その美しい女の人は黒い髪に少し浅黒い肌をしていました。髪と同じ色のつややかな長い睫毛が頬に影を落としています。

『少し遠い国から嫁いでこられたのかしら。』

ミーツエはギルは南方の人間だと思っていました。雪深いカナルトに隣接する大国テルゼの人間は色白で色素の薄い髪の色が特徴です。ですからギルのことをテルゼの王子であると外見で想像のつく人はまずいないでしょう。ミーツエが見た噂の王子の肖像画も画家の思い込みか辛うじて黒髪だった気はしますが色白の王子に仕上げられていた気がします。

『綺麗な人だわ。』

ずっと眠っているのかわからず王妃は美しい衣装を身に着け、髪も綺麗に梳かれていました。

『王様に愛されているのね。こんなに大切にされているんだもの。』

「オリビエの呪いで眠りについたまま、もう半年ですね…母上が元に戻らないと本当に父上がご病気になってもおかしくないですよ。どんなに父上が貴方を愛しているか……。」

ギルが悲しそうに母親の顔をのぞきこむのにミーツエは切なくなりました。

『遅かったじゃないか。待ちくたびれたよ。』

ギルの部屋につくとシマ猫がミーツエを待っていました。

『じめんなさい！ちょっと……。』

『ま、いいよ。あいつと一緒にだったんだろう？楽しかったかい？』

『そ、そんなんじゃない……。え、と、ギルのご両親に会ってたのよ。』

『ふん。』

『ギルはこの国の王子様だったみたいね。』

『ミミもお姫様だろ？人間に戻ったらアタックできるじゃないか。』

『ダメよ！ギルは女の人が苦手って有名なの。私は猫だからかわいがってくれるけど……もし戻れたとしたら見向きもされないわ。』

『そんなものかな。あいつは骨のあるやつだと思っけど？』

『シマさんはギルのこと悪く思ってないの？』

『別に……。ミミとの態度の違いにはむかつくけど、なんか、こう……。』

ミーツエの質問にシマ猫は考え込んでしまいました。

『ミミ、アタイ何だかここにきて頭が変なんだ。時々、胸も苦しくなる。』

『ずっと寒かったから体調が悪くなったのかしら……。』

『……少し、眠るよ。』

『わかったわ。』

具合が悪そうなおシママ猫が心配なミーシエはせめてシママ猫に寄り添う
ことにしました。

ねごと噂話(前書き)

お久しぶりですいません。

ねごと噂話

『ミミ、あなたはホントに心の優しい子だ。』

少し眠ってしまったシマ猫が目を覚ますと隣でかわいらしく寝息をたてている白い猫がいます。きつと自分のことを心配して隣に居たのでしょうか。なんだかシマ猫はムズ痒い気持ちになりました。

『でも、この城に入ってからひどく頭痛がする。アタイの体何だかおかしい。』

もしかして雪の魔女の魔法が消えてしまってゴブリンの姿にもどってしまったのではないかとシマ猫は心配になりました。でも、そんなことこの小さな心優しい姫に言ったら心配させてしまうだけです。

『戻るようなことがあるといけないからミミとは離れて行動した方がいいな。』

シマ猫はなんだか数日の間にすっかりギルと同じようにミミに自分が骨抜きにされているように感じます。でも、小さな白猫を見てそんな自分も悪くないと思いました。

『体調も悪いのにシマさんはどこへ行ったのかしら。』

朝、目を覚ますとシマ猫の姿はありませんでした。しばらくギルの手伝いをしてからここを離れようと思っっているミミは情報収集する気でゆつくりと伸びをして体を馴らしました。

『ギルもどこかへ出かけたみたい。皆お昼には帰ってくるかしら？まあ、いいわ。情報収集と言えば侍女さんたちだもの。』

昨日、通路や部屋の位置を簡単に頭に詰め込んだミーツエは軽い足取りで午前の休憩中の侍女の部屋へと忍び込みました。ここは宮殿の中央にある侍女の控室で王族の世話周りの係りの者が集まっているようです。

「アルギル様が帰ってきたんだって？」

「昨日、ね？コノアは見たんだって！なんか一層恰好良くおなりになっっていたそうよ！なんだか、こう、大人の色気ってやつ！？」

「え〜！？ウソ！見たい！」

「アントン卿が早馬立てて呼び戻したらしいわよ！あの高慢ちきな娘がダダこねたんでしようよ？」

「お父様〜。私、アルギル様をお慕いしてるんですの〜！とか、なんとか言っちゃってさ！」

「まったく、王妃様の為にアルギル様が頑張ってるのに何やってんのよ！あの親子は！」

「ほんと、王様が倒れられたのも自分たちが無能なせいじゃない！」

「あゝあ。王妃様が早く目覚めてくれないかしら。」

「あんなさびしそうな国王様を見てもられないわ。」

侍女たちは思い思いを口々にしていました。誰も彼も王妃が目覚めるのを心待ちにしています。

「毎日教会で王妃様が目覚めることをみんなでお祈りするしか出来ないなんて。」

「いつ目覚められてもいいように今日も張り切って王妃様を綺麗にして差し上げましょうっ?」

「そうね。王様が気を落とされているんだもの。私たちまで暗い顔をしていては王妃様に叱られるわ。」

「そうよ。」

「そうよね。」

王妃は皆からとても慕われる人柄だったようです。ギルの母親がそんな暖かい人で良かったとミーツェは侍女の話しに聞き耳を立てました。

『オリビエだったらギルのお母さんに敵対している人から話を聞くに違いないわ。』

アントン卿……というのはどうやら侍女から嫌われているようです。

『アントン卿のところへ行こう。』

ミーツェはするりと侍女たちの部屋を出ると廊下を走っていきま
した。

「お父様、アルギル様は戻られたのでしょうか？なのに、どうして私
に会いに来てくだらないの？」

アントン卿の住まい近くまできてミーツェが耳を澄ましていると少
し女の子にしては低音の声の持ち主が父親に抗議していました。

「ジェリー。アルギル様はお忙しくてな……。」

「毎日、お茶の支度して待ってるのに。」

口を尖らせた女の子はなるほど、ギルが言ったようにアヒルのよう
な口をしています。

『あの子もギルのこと好きなのね……。』

ミーツェは急に自分が猫であることが悲しくなりました。

『私はギルとお話もできないもの。』

女嫌いで通っているギルもいつかは誰かと結婚することでしょう。
その相手が自分であるようにには思えません。猫になった自分の姿が
窓に映っています。ミーツェはそつとため息をつきました。

アントン卿の所では娘がギルと会いたいとダダをこねるばかりで新しい情報は得られませんでした。仕方なく、ミーツエはギルがいる部屋へと足を運びます。すると、外から大きな鐘の音が聞こえてきました。

カンカンカンカン

カンカンカンカン

『なにかしら。』

ミーツエは窓から身を乗り出して外を見ました。高いお城の窓からは大きな船が港に着く様が見れます。

『絵本に出てくる海賊船みたいだわ!』

船は大きな鐘の音を立てながら赤い国旗をたくさんなびかせています。す。
にわかに城も騒がしくなっていました。

ねごと海軍王

「ゴードイト様がやってこられたそうよ！」

あわただしく廊下を急ぐ侍女たちが話していました。ミーツェは耳を澄まします。

「王妃様を国に連れて帰るおつもりかしら……。」

「ゴードイト様は王妃様をそれはそれは慕っていたそうよ。王妃様を娶るために王様はゴードイト様に決闘を申し込まれたくらいだもの。」

「はあ。さすが海賊王。」

「じらー！」

「……口が過ぎました。さすが海軍王です。」

どうやら大きな船でやってきたのは王妃の弟のようです。侍女たちは王妃様が連れていかれたらどうしようかと心配事を口にしていました。

『王広間に行ったら様子が分かるわね。』

ミーツェは広間に向かう廊下を急ぎました。ところが大きな男の声が王妃の部屋の前から聞こえてきます。

『まさか、王様に会わないで王妃様を連れていく気なのかしら！』

方向転換をしたミーツエは軽やかに壁を蹴って王妃の部屋の方へ向かいます。すると侍女長らしき夫人が大きな男の人の前で両手を広げて王妃の部屋の前で立ちほだかつていました。

「お通しできません！」

「こんな事になるから嫁がせたくなかつたんだ！そこを退くんだ！レイラは連れて帰る。」

「せめて、王様に許可を……。」

「今更、許可など！」

今にもドアを蹴破って行きそうな男に焦ったミーツエが飛び出しました。

フー

ミーツエは猫ですから体で威嚇するしかできません。でも、男が一步でも踏み出そうなら爪を出す覚悟でいました。じっと男を見つめていると男は急にフニャツとした顔になりました。

「おい、なんだ、この可愛いのは。」

屈強そうな大きな男から思わずこんな言葉がこぼれました。ミーツエはその言葉とともに簡単に男に首根っこを掴まれてしまいました。手足をジタバタしてもどうしようもありません。そのとき男の後ろから息の弾んだ声が聞こえてきました。ギルが走ってきたのです。

「デイ！」

その声を聞くと男はそのまま体を反転させてミーツエを摘まんだままもう片方の手でギルの頭をクシャクシャと撫ぜました。

「アルギル。でっかくなつたな。ますますレイラに似てきた。」

「デイ、母上を連れて行かないでくれ。必ず俺が目覚めさせてみせるから。」

「……。アルギル。俺はもう見ていられないんだよ。あんなにハツラツとして生きていたレイラがまるで死んだ魚の目をしていた。体裁の為に毎日部屋に閉じ込められて。あんなのはレイラじゃない。こんなことになったのはあの男のせいだ。海の魚を水槽で飼おうとしたんだ。」

「父上は母上を愛しているよ。」

「愛しているなら手放すべきだ。」

「デイ！」

『ギル！取り敢えず助けて！』

会話を聞きながらジタバタしていたミーツエは訴えました。

「ミミミ？」

「アルギル、お前こいつを知ってるのか？俺も沢山猫を飼ってるがこんな毛並みの綺麗なのは初めてだ。なんだ？この可愛いのは！」

「デイ、それは俺の猫だよ。リボンもついてるだろう?。」

「エラく立派な宝石までつけてるな。瞳もブルーでどこかのお姫さんみたいだ。」

リボンの先の指輪を指でつつかれてミーツェは目を白黒させてしまいます。

「デイ、返して。」

「……。くれない?。」

「駄目!。」

デイとギルに呼ばれている男は名残惜しそうにミーツェをギルの腕の中に落としました。ギルはミーツェを抱き直すと鼻先にチュツとキスをします。なんとかデイから逃れたミーツェはホツとしました。

「お前が母上を守ってくれたんだな。」

ギルは優しい目でミーツェを見ます。ミーツェはドキドキしてしまいました。

「いっばしに俺に向かって威嚇してたぞ。」

「よしよし。いい子だ。」

「……。随分気に入ったもんだな。まあ、めちやくちゃかわいいが。」

「

「デイ。父上と話をして。いきなり来て母上を連れて帰るなんて酷いよ。」

「話すことなんてないだろ？」

「とにかく時間が欲しいんだ。」

「……レイラが呪われてから随分待った。兄上たちももう限界だと言っているんだ。レイラを大切にしてこそその同盟だろう？」

「デイ。お願いだよ。せめて食事だけでも。」

「……はあ。レイラと同じ顔には弱い。」

「！ありがとうございます。」

「ただし、明日までだ。明日にはレイラを連れて帰る。」

なんとかギルが話をしますがデイは頑としてそう言い放つとそれからは黙ってしまいました。ミーツェはオロオロとその様子を見ているばかり。

『この人が侍女さんたちが言っていたゴードイト様ね。そうだね、思い出した！たしかテルゼの王は海軍強化の為に海の王者と言われるハモイと同盟を結ぶために政略結婚したのだね。でも、王妃様は皆に愛されて幸せだったのではなかったのかしら……。』

そこに王妃の呪いを解くカギがある。ミーツェはそう確信しました。

ねごと告白

ミーツエは頭を巡らせませす。

『なにか、見落としているんじゃないかしら。』

デイはギルの叔父だというのも納得で浅黒い日に焼けた肌に漆黒の髪をしていました。王妃と似ています。

『私はオリビエにお父様が最も嫌いな猫に姿を変えられたわ。』

ギルの母親はいったいどんな呪いをかけられているのでしょうか。それ以上思いつかないミーツエはふと王様が気になって寝室の窓辺に行つて様子を伺いました。王は寝室のベットの上で天井を見つめていました。

『王様には外の騒ぎは内緒なのかしら。』

大きな鐘の音がしたのです。内緒にしていたとしてもハモイの船が来たことは気づいているかもしれません。寂しそうな王の顔を見つめていると不意にミーツエは王と目が合いました。すると王はゆっくりと起き上がると窓辺に立ち、窓を開けてミーツエを部屋に招き入れました。

「お前はアルギルがかわいがつてる猫の……ミミだったかな。」

まだ体が重いのか王はミーツエを抱き上げるとベットに腰掛けました。ミーツエは驚きましたが王の問いに頷きました。

「ハモイの船が来たようだね。レイラを連れ戻しに……。」

『やっぱり気づいていらっしやっただのね。』

ミーツエの声を聞くと頷いた王は遠い目をしながらミーツエの頭を撫ぜ、話し出しました。

「なにかと他の連中には話せないからな。レイラを愛していると言えばそれを利用しようとする者もいるし、消そうとする者もいる。私がレイラに執着すればするほど……レイラが危うい。皆は知らないが本当はレイラとの結婚は政略結婚に持ち込んだ私の片思いなのだよ。ずっとレイラは私の憧れだった。」

国が大きくなるほど問題も複雑です。テルゼの王が王妃を娶った頃は国の中で二つの派閥が対立していました。

「昔、私がまだ10歳だった頃、ハモイの隣国のアートンに視察に行った時のことだ。ハモイとの国境近くの港町で私は従者を巻いて船を見に行ったんだ。なに、一度大きな船を見てみたくてね。そこには海賊船が止まっていて甲板で子供たちが遊んでいて、その中に美しい漆黒の髪をした少女が居たんだ。私はその娘に見とれてしまつて、もつと見ようと身を乗り出して海に落ちてね。……初めて深い海に落ちて気が動転してしまつてジタバタしていたら「落ち着け！」つて耳元で声がして、振り向いたらさっきの少女が私を助けに海に飛び込んで来てくれていたんだ。当然その娘もびしょ濡れで、でも恨み言ひとつ言わずに陸に上げてくれてからも「大丈夫か？」つて声をかけてくれた。……その笑顔が忘れられなくてね。その後ハモイが内部紛争の末に悪評だったそれまでの王族が一掃されて海賊呼ばわれされていた現王になった時、私を救った少女が王女となつていたのを知つたんだ。それがレイラ。私が初恋を实らせるため

に何とか頑張っていたなんて誰も知らないだろうがね。」

王は目を細めて悲しそうにしていました。

「レイラはここに来てからすっかり元気が無くなってしまった。私の我が儘で王妃にしたばかりに。ハモイが返せと言うなら仕方ないのかもしれない……けれど……誰にも渡したくないのだ。」

ミーツエを撫ぜる手が震えていました。誰にも打ち明けられない告白。今まで弱音を吐くことも出来なかったのでしょうか。

『王妃様を深く愛していらっしやるのね。何とかゴードイト様が帰ってくれないかしら……。王様、私、ゴードイト様になんとか帰ってもらえるように頼んできます！』

ミーツエはそう言うと王の膝の上から床に降りて勇ましく王を見据えました。

「お前が何とかしてくれるのかい？」

キョトンとしている王にミーツエは頷きました。少しでも王の気持ちに報えないかと思いつながら。

「ふふ。お前は可愛いな。アルギルが気に入るわけだ。じゃあ、頼んだよ。」

王は猫が何とかしてくれるなんてこれぼっちも思っていなかったでしょう。ミーツエが人間だなんて思ってもないんですから。でも、ミーツエの姿に少し元気づけられたようでゆっくりとベットから起き上がると鈴を鳴らし、従者を呼びました。

「レイラを連れていかれるわけにはいかないからな。」

王はミーツェにウインクすると晚餐に出席するために着替えを始めた。

誓いの白い花

王とギルが晚餐に出席してデイを説得している頃、ミーツエはシマ猫を探していました。ミーツエがデイを説得する必要もなさそうですし、一人で悩んでいるよりシマ猫に話を聞いてもらって相談しようと思ったからです。

『シマさん、どこ行っちゃったのかしら。』

ギルの部屋にも帰っていないようです。ミーツエは急に心細くなりました。

『体調も悪かったのに……いったいどこへ。』

部屋の中を探し回っていると本棚の所にあつた突起を押ししてしまいました。するとガラガラと音がしながら本棚の後ろから隠し部屋が出てきました。

『これは？』

どうやらギルの秘密の部屋のようです。そこには小さな机と沢山積み重なった本が所狭しと並べられていました。その多くは魔法に関するもので、呪いを解く方法やオリビエに関する調査票なども置いてありました。その中でミーツエが目をついたのは机の上に会った美しい刺繍の柄が入った小さな赤い本です。

『これだけ他の本とは違うみたい。』

ミーツエは器用に前足でパラパラと本をめくりました。

○月○日

作法と国の歴史の勉強。言葉遣いを直す授業があった。発音がおかしいと教師に何度も注意された。今日はイーサンも執務が忙しくて来ないらしい。

○月○日

大臣に嫌味を言われる。
先月のパーティにイーサンが私を同伴しなかったのは私が「恥ずかしい王妃」だからだと言っていた。
ムカつく。

○月○日

イーサンにドレスを贈ってもらった。
大臣の娘に「肌の色が合わない」と言われて部屋からでてすぐに着替えた。

『これって王妃様の日記？』

内容からすると王妃のもので間違いないようです。ミーツェは読み進めるとため息をつきました。

『どうやら王妃様は異国に来て色々のご苦労されたみたいね。イーサンって言うのが王様のことだとしたら……。王様の話と合わせ

ると、彼女は王様に愛されていないと思っていたのではないかしら。」

ミーツエは考えつくとなんとか王妃の眠る部屋にいけなしかと思案しました。

『王妃様に王様が愛していることを話してあげれば目覚めることができるのではないかしら。』

しかし、王妃の部屋は3つの扉の奥にあり、おいそれと入れる筈もありません。

『そうだわ、シマさんも探さないと……。どこかで倒れたりしていたらどうしよう。』

ミーツエはシマ猫が居そうなところを探しました。けれどもなかなか見つかりません。がっかりと肩を落として歩いていると門番の部屋から声が聞こえてきました。

「……それが生ごみが乗ってるのかと思ったら具合の悪そうな猫ですよ。」

その言葉で立ち止まったミーツエは会話の内容にますます耳を傾けます。

「取り敢えず後で死んだかどうかみてくるさ。」

「中庭の東屋の屋根の上だろ？庭番にさせたらいいじゃないか。」

「あそこは王妃様のお気に入りの場所だったんだ。猫なんて入れた

のを知られたら俺が咎められねえか？」

「じゃあ、こっそり始末するんだな。」

「ああ。」

その会話を聞いたミーツエは顔が青くなりました。

『シマさんに何かあったらどうしよう！』

ミーツエは胸を締め付けられながら東屋に急ぎます。

『どうか、シマさんが無事でありますように。』

ミーツエが東屋に近づくと東屋の屋根の上にごったりと倒れているシマ猫がいました。

『シマさん！』

ミーツエが揺らしてもシマ猫は目を開けません。

『シマさん！お願い！目を開けて！』

ミーツエの目から溜まっていた涙の粒が次々と落ちました。すると

……
『ん……っ?』

シマ猫がようやく目を開けてくれました。

『ミミ、ミミ、あんた、どうしたんだい?』

『シマさん!シマさん!シマさん!』

のっそりと立ち上がったシマ猫にミーツエは堪らず抱きつきました。

『ミミ、泣いているのかい?』

『だって、シマさんが目を覚まさないから………どうしようかと!』

興奮したミーツエは涙が止まりそうにありません。シマ猫は困った顔をして、でも嬉しそうにミーツエの背中をトントンと優しく手で撫でました。

『ごめんよ、ミミ。ここで日向ぼっこしてたら寝てしまったんだ。

なんだかここは落ち着いてね。』

『お体は大丈夫なんですか?』

その質問にシマ猫は苦笑して答えます。

『実は城の中に入ると頭がズキズキするんだ。もしかしたらゴブリンの姿にもどつてしまつかもしれない。そうだったら、私は森に帰るよ。』

『そんな……せっかくギルのお母様の悩みの元が掴めそうだったのに。まだ帰るなんて言わないでください。シマさんがいると心強いんです……。』

『……ふうん。それが解決すればギルの母親は呪いが解けるのかな？』

『雪の魔女の言っていたことがそうなら、解けるはずです。』

『いったいどんな負の気持ちか呪いに影響していたんだい？』

『私の推測でしかないのですが、ギルのお母様は王様に愛されていないと思っていたのではないかしら。元々貴族ではない方だったようですし、ここで居場所がないと感じていたのかもしれない。意地悪を言う方も多かったようですし、言葉にも苦労されたみたいで……。』

話しながらミーツエがシマ猫を見るとシマ猫が頭を抱えていました。

『シマさん！どうしたの！？』

『あ……頭が……。』

『大変！どうしよう！横になりますか？』

慌てたミーツエがシマ猫に駆け寄ると大丈夫だと立ち上がろうとしたシマ猫が足を滑らして下に落ちてしまいました。

『シマさん!』

ミーツエは急いで下に降りるとシマ猫が満開の小さな白い花の上に落ちていました。

『シマさん?』

『この……この花は「レイラ」……私の祖国の花。イーサンが決して枯らせないと誓った私と同じ名前の花……。』

見るとふかふかの花の上のシマ猫の体は異常がなさそうでした。でも、シマ猫の目からはぼろぼろと涙が落ちていました。

ねこと祈り

『シマさんがレイラ王妃だったんだわ……。』

ミーツエは泣きながら気を失ってしまったシマ猫の頬の涙の後をなぞりました。吐息は落ち着き、具合は悪くないようです。言葉遣いが言葉遣いだったためにシマ猫が王妃だなんてミーツエは今まで思いつかなかったのです。

『そう考えたらシマさんがゴブリンでいた時城下に居たのも納得できるわ。』

森の住人ゴブリンが城下に現れること事態、奇異なのです。でも、オリビエに姿を変えられた王妃が城を追われ、城下に逃げ込んだなら十分考えられることです。

『でもどうして記憶までこんなに嚴重に閉じ込めているのかしら。ギルの片目しかない目を狙わせてまでして城に近づけないようにしたのはどうしてかしら。』

オリビエの性格なら意識を残したまま城下を追われる哀れな王妃を高笑いしながら見物したはずです。そう、ミーツエのように。なのに、オリビエは王妃の記憶を閉じ込め、王子の目を狙うよう信じ込ませていました。万が一城に入ったとしても大事な王子の大切な目を狙うゴブリンを城の者は許しはしないでしょう。カナルトの森でゴブリンが殺されなかったのはミーツエのおかげです。

『美しい王妃様をゴブリンに変えるなんてオリビエらしいわ。……。王妃様はオリビエの弱みを知っていたのかしら。』

シマ猫の寝顔を見ながらミーツェは一人思案していました。

次の朝、二人の説得も虚しくデイはレイラを連れて帰ると王に伝えました。新しく別の王妃を迎えるようにとも。

ここで王が無理にデイを追い返せばたちまちハモイはテルゼに乗り込んでくるでしょう。

「父上、本当に良いのですか!？」

ギルが非難する声が王広間に響きました。

まだ早朝の時間に人払いをして王はデイの決定を静かに聞いていました。

「テルゼの王よ。レイラが帰ったところであなたには何一つ不自由なことは無いはずだ。まして目覚めもしない今はただの人形に過ぎない。離縁して他のふさわしい王妃を選べばいいんだ。それが貴方の為でもあり、レイラの為でもある。」

王は何も答えず椅子に座ったままで目を伏せました。王が決心して王妃の部屋の衛兵に連絡を取ろうとした時、その目の前には一匹のシマ猫が小さな白い花の茎を啜っていました。

ニヤア。

猫はひと鳴きします。

「シマ？」

ギルがそう声をかけた時、彼の白い猫が彼の足にまとわりついてきました。

「ミミミ……。」

彼の愛しい白猫はまっすぐとシマ猫を見て微動だにしません。つられてギルも猫が見つめる事にしました。もちろんデイもこのおかしな光景を見守っていました。

『ミミミ、本当にこんなことでギルの母親が目覚めるのかい？』

目の前の王がシマ猫を食い入るように見えています。居心地の悪いシマ猫は白い小さな花を鼻先に置くと王を見つめました。ミーツエに無理やり起こされたシマ猫は白い花を持って王様に渡せばいいとしか聞いていません。

『雪の魔女が言っていたことが本当ならきつと……。』

今朝目覚めたシマ猫は屋根から落ちたことしか覚えていませんでした。ミーツエがいくつか質問するものの首を振るばかりです。

『思い出したくないからきつと頭が痛くなるんだわ。王様、お願いです。貴方の愛を王妃様に伝えてください。』

ミーツエが何を言っても頭が痛くなるだけだと判断したミーツエはシマ猫を王に引き合わせることを考え付きました。でも、何も策はないのです。

『王様……頑張つて!』

ミーツエはただ、ただ、祈りました。王妃が幸せに目覚めるように。

「この花は……レイラ……。」

まだ体調が優れない王は椅子を降りて膝をつくときマ猫の鼻の頭に
ある小さな花を手に取りました。

「……。私は間違っていた。国の影響やレイラを目覚めさせる方法
をいくつか提案するよりも大事な話をしなければならなかった。」

その言葉はまっすぐにシマ猫を通り、後ろにいたデイに届きました。

「ゴードイト。お前の姉さんを連れて行かんでくれ。レイラが目覚
めなくともレイラが私に必要なことに変わりはない。レイラの代わ
りなんてこの世には存在しないのだよ。」

「……王……いや……義兄さん……。」

「私はこの花に誓った。レイラを悲しませないよう、決して枯らさ
ないと。私は……レイラを……。」

王はシマ猫を見て、はっきりと言いました。

「レイラを愛しているんだ。」

……そのとき、シマ猫の体がぐにゃりと揺れました。

『シマさん!?!』

シマ猫の様子を祈りながら見ていたミーツエが叫びました。

シマ猫の体はまるで大きなシャボン玉のように半透明に膨れ上がり、虹色に輝いてから……

パチン!

弾け飛んで消えてしまいました。

『シマさん!シマさん!?!』

ミーツエが駆け寄ると小さな白い花びらが一枚。シマ猫がいたところに落ちていきます。

『どうなっちゃったのかしら!?!』

蒼白になるミーツエに間もなくして王妃の部屋から飛んできた衛兵が王の間のドアを手荒に叩きました。

「ご、ご無礼を承知で、突然訪問して申し上げます!お、王妃様が……王妃様が目覚められました!」

その言葉に城は騒然となりました。

王妃の目覚め

すぐさま衛兵を招き入れた王はギルとデイに抱えられながら王妃の部屋へと急ぎました。王妃のベッドの周りには医師と侍女たちが群がっています。その集団は王が部屋に入ってくるのを見るとすぐにベッドから退き、膝についてその光景を固唾をのんで見守っていました。

「イーサン。……ただいま。」

王が近づくと王の方に手を伸ばして王妃がそう、言いました。

「レイラ……。」

王妃に手を優しくつかむとガバリと抱きしめる王の背中に王妃は腕を回して答えました。

「ああ、お帰り。レイラ……。」

王妃は少し震え、耳元でささやきました。

「言葉遣いも作法もなっていないテルゼの王妃にはふさわしくない私だけど……イーサンの傍に居ていいかしら。」

王は苦笑します。今まで自分は王妃の何を見てきたのかと。

「……レイラ。君が努力してくれていることは十分わかっていたよ。でも私は言葉遣いや作法より、オモチャの剣を握って駆け回るレイラが好きなんだよ。」

「……ど、どうして知ってるの!？」

「君の子供の頃のこと?……後でゆっくり話すよ。私は君を守るつもりで君をずっと傷つけていたようだ。」

「……。」

「君の全てが愛しいんだよ、レイラ。」

そついうと今度は王が声を潜めて言いました。

「みんなが見ているから小さな声で言うけど、君こそこんなひ弱で病弱な私を愛してくれるかい?」

その言葉に王妃はにっこり微笑んで。

「もちろん。」

と言いました。

誰がどう見てもその後の甘いムードに家臣たちは一人、また一人と

「こそごと王妃の部屋から出て行きました。」

「ああ当てられちゃあ、しょうがない。」

「デイもそう言っつてギルと顔を見合わせて部屋を後にしていました。」

「父上つてあんな性格だったかな……。」

「ギルは不思議なものを見たような顔で言いました。以前のギルの父親は母親に対して口数も少なく、優しく接しているけれど威厳を保っていました。でも、先ほど見た父親の姿は一人の女の愛の乞うただの男です。」

「ホントに好きな女つてのは違うのさ。面目も、地位だつて関係ない。ただ、がむしゃらに欲しくなるからな。」

「俺は理解できませんね。」

「お前だつてそう思える相手に出会えたらそうなるさ。」

「ふん。」

「ギルは納得できない顔でミーツエを抱き上げました。」

「俺は当分ミミミだけで良いですよ。」

「……まあ、お前に色事はまだ早いかな……でも、確かにかわいいよな……やっぱり、その猫俺にくれないか？」

「駄目。」

その会話を聞きながらミーツェはもう少しだけこうしていたいと感じていました。

「さて、色々聞いておきたいのですが、母上。」

辺りが暗くなるまで待っていましたが一向に王妃の部屋から出てこない王に業を煮やしたギルが部屋のドアを叩きました。

「父上、元気があるなら政務に戻ってください。」

「お前がいるからいいだろう？レイラがやっと戻ってきたんだ。今日くらい一緒に居させてくれ。」

「……。そこに居るのは本当に父上なんでしょうね？」

だらしなく顔を綻ばせながら王は王妃の腰を抱きながら長椅子に座っています。

「今日からはレイラを臆面なく愛する男に生まれ変わったのだよ。今までなにが楽しくて素っ気ないふりをしていたのか過去の自分に説教したいくらいだ。」

「……。はあ。」

力説する王にギルも呆れ顔です。デイも今度は王妃主催の晩餐に誘ってくれとさっさとハモイに帰って行きました。

「アルギル。ミミは連れて来てくれた？私、あの子が居なかったらここに戻ってこれなかったわ。」

「おお。アルギルの白い猫か。私もあの猫にレイラを口説く勇気をもたらったぞ。」

「やあん。」

ギルに連れられてきたミーツェは二人の笑顔に答えました。

『シマさん……。いや、レイラ王妃。本当に良かった。』

「これまでの話しをするわ。私はオリビエの魔法でゴブリンに変えられ、城を追われたの。カナルトの森で雪の魔女にシマ猫の姿に変えてもらったのよ。」

「ええ！？」

「あの時はアルギルに酷い目に合わされたわ。」

ギルが驚きの声を上げたのを見て王妃はいたずらっ子のような顔をしました。

「そうなのか！？レイラ！」

「イーサン、あなただつてゴブリンだつた私を城から追い出したでしよ。話の腰を折らないで取り敢えずは聞いてちょうだい。私も記憶を消されていたの。だから、アルギルの目を襲った。あの時はごめんね、アルギル。お前の左目はオリビエの指輪の宝石になつてる。私はそれに気づいていたの。」

「オリビエ剣を向けた時に……失つたのかと。」

「私は雪の魔女に聞いていたの。オリビエが王という存在自体に恨みがあるからね。破滅の道を辿った東の国であつた出来事が発端なのよ。彼女は世界を恨んでる。大切なものすべてを失つて。」

魔女と王様

シンと静まり返った王妃の部屋で、王妃の話しが続けられます。王妃は伏し目がちに話しました。

「東の国でオリビエは宮廷魔法使いとして働いていたんですって。とっても重宝がられていたって言ってたわ。彼女はお医者様の旦那様と最愛の息子と三人で幸せに暮らしていた。……東の国の王様が彼女を気に入って彼女に離縁と後宮入りを強制するまではね。当然彼女は断った。でも……断った彼女を待っていたのは焼け野原になった自宅と帰らぬ人となった家族だった。地面を爪をはがれるまでかきながら泣き叫ぶ声は森中に響いたというわ。」

「…………だから。」

「そう。だからオリビエは東の国を滅ぼした。対外的には悪女に滅ぼされたと伝えられているけれど、それは辛うじて残った国の民の噂話に過ぎない。オリビエは蛇の邪神の化身に魂を授け、欲と恨みの塊になった。そこまでして復讐は果たしたけど……その恨みと欲はオリビエの体という服を着たまま独り歩きするようになってしまった。」

「どうして雪の魔女がそれを？」

「彼女はオリビエのたった一人の弟子だったそうよ。」

「…………。」

『蛇の邪神に魂を売ったところからしかローランドの報告もなかつ

たわ。』

ミーツエはオリビエのことが少し気の毒になりました。もちろん、だからと言ってなんの罪のない人を苦しめていいことにはなりません。

「雪の魔女はアルギルならオリビエを助けてやれると言ったわ。」

「俺が？」

「貴方はオリビエが溺愛していた息子に似ているそうよ。特にその瞳の色が。オリビエはわざわざ貴方の瞳を奪って指輪にして持ち歩いている。彼女に残っている愛情が無意識にさせたんじゃないかって雪の魔女は思ってるのよ。」

「だからって助けるってどうするんだよ。」

「暴走したオリビエはもう昔のオリビエじゃないわ。……助けるって意味は……。」

「……わかった。オリビエがあの時俺に止めを刺さずに左目だけを奪っていった訳がなんとなく理解できたよ。俺は自分の目も返してもらわないといけない。……もうすこし雪の魔女に話が聞きたいな。カナルトに行けば会える？」

「そうね……。」

そこで王妃はミーツエを意味深に見つめました。

「ミミを連れて行けばきつと会えるわよ。それに……実はミミはね

……。」

ふぎゃ~~~~~っ

王妃の話しを黙って聞いていたミーツエは叫びました。

『駄目、駄目、だめえ！ホントは人間だってばらしたら私、恥ずかしくってギルと一緒に居られないもの！』

急にミーツエが騒ぎ出したのでギルも慌てます。

「どうしたんだ！？ミミチ？」

すると真っ直ぐミーツエを見ていた王妃はこう言いました。

「そうねえ。（今は）言わない方が良かったら。アルギルはミミチやんが好きなのよねえ。」

「母上？」

「貴方に来ている縁談話をすべて保留にするわ。是非とも未来のお嫁さんの為に頑張ってオリビエを倒してちょうだい！」

「何の話だよ？それとこれとは……まあ、結婚が遠のくならそれでいいけど。」

ギルは不思議そうな顔で母親を見ていました。王様は王妃に寄り添って対して口も挟まず黙って聞いていましたが、

「お前の名誉とテルゼの誇りの為にオリビエを倒してくるがいい。」

但し、お前の命より大切なものはない。それを忘れてくれるな。」
そう言つてギルの手を握りました。

「父上……。」

そうしてギルは再びカナルトの森へとミーツエを連れて行くことになりました。

「ミミ。あなたのおかげで助かったよ。ありがとう。」

王妃はミーツエと二人きりになるとおどけた口調でそう言いました。

『私はなにも……。でもシマさんが人間に戻れて良かったわ。』

ミーツエは嬉しそうに王妃を見上げました。

「大丈夫。ミミはどこかの王女様でしょ？人間に戻つたら必ず私がアルギルと結婚させてあげるからね。ああ、でもあなたのこともつと聞いておけば良かったのに……。それだけは悔やまれるわ。人間に戻つたら言葉が通じないんだもの。」

『……………』

「今、ミミが人間だつてばらしたらあの子のことだもの恥ずかしがつてあなたを傍に置かなくなるわ。後で盛大にばらしたらどんなに

慌てるかしら！楽しみ！」

『…………』

王妃はいたずらを仕掛ける子供の様にわくわくとした目でミーツエを見ています。

「ミミちゃん。あの子のこと頼んだわよ。」

その言葉と同時に額に王妃の口付けが落ちてきました。真っ赤になったミーツエは額くのが精一杯でした。

ねこと期待

『人間に戻れてもギルの傍に居れる……？』

カナルトの森に向う馬車のギルの腕の中でミーツェは夢見心地でした。

『ギルと結婚？』

ミーツェは恥ずかしくって仕方なくなりました。この間まで憂鬱だった結婚話が今は希望に満ちています。大国テルゼの王子……いえ、ギルと一緒に居れたらどんなことでも楽しいに違いないと思いました。

『オリビエを倒して、人間に戻って……。そうしたら……。』

ミーツェはウトウトと眠ってしまったギルを下から見上げるだけでドキドキしました。猫になって散々だった自分を助けてくれた優しいギル。傷を負ったときは何度もミーツェの様子を伺いに来てくれたのも知っています。

『ギル……大好き。』

ミーツェの小さな胸の中はギルでいっぱいです。

国のため、父親のため、ローランドのため……そして自分の為にオリビエを倒そうとミーツェは誓いました。

「雪が降らない事には雪の魔女には会えないな。母上はミミは特別だから大切にするように言っていたんだが……。」

宿に着いたギルはラルフに後を濁すように言いました。ラルフはこれ以上主人に彼のかわいい猫を可愛がる方法があるのか首をひねりました。ギルは母親からミミを淑女の様に扱いなさいと言われていました。ギルが「十分可愛がっているつもりだ」と言うとミミの前で着替えをするとかヤタラにキスするとか言われていました。含みのある笑顔と共に。

「猫に勲章と郊外の城を褒美に取らせるとは王妃様や王様には驚かされました。」

ラルフは数日前の出来事を思い浮かべて言いました。レイラ王妃は自分が戻れたのはミミのお蔭だと豪語するや否や小さな白い猫に勲章と褒美を取らせました。王妃に内緒の打ち明け話をしてもらった王もニコニコとそれはそれは丁重な扱いで子猫を扱いました。

「やっぱりお前は凄い猫だ。ミミ。」

ギルの声が聞こえていつもの柔らかい感触が鼻の上でした子猫は彼を見ながら

にやおん。

と言いました。

カナルトに着いたギルたちは宿で雪が降るのを待ってから迷いの森へ行くことにしました。

「しかし、母上があのでゴブリンだったとは……。」

「王妃様は私の無礼もお許しくございました。」

「俺もラルフと同じだ。母上と気づかず酷い目にあわせたぞ。もう、気にするな。」

「すみません……。」

「あ……。」

「どうされました？」

「ラルフ、準備をしろ。雪が降ってきた。」

ギルとラルフは舞い始めた雪を見ながら急いで出かける準備にかかります。

『私も連れて行ってくれないと!』

その様子を見て置いてかれまいとミーツェもギルの所へ急ぎました。

「ミミ。よし。良い子だ。俺のマントに入れ。外は寒いからな。」

ギルは当然の様にミーツエを抱いて彼のマントの中に入れました。ミーツエはマントの隙間から顔を出します。ミーツエはいつの間にかこの指定席にも馴染んできていました。

『雪の魔女と会えるかしら……。』

ミーツエの不安を余所に雪がつつすらと大地にかかる頃、ギルたちの前に雪の魔女は現れました。

金色の雪の中から現れたのは間違いなく雪の魔女です。

しばしその姿に見とれていたギルとラルフは考えていた質問を彼女に投げかけました。

「初めまして、雪の魔女。俺の名はフェリエ。ロアノア。ステラツティ。テルゼ。アルギル。貴方は俺のことは知っているのだろうか？」

雪の魔女の言葉は呪いのかかっているかかかっていないギルには通じません。雪の魔女はギルを見ると彼にゆっくりと頷きました。

「俺が調べた魔女の倒し方が数種類ある。良い方法に頷いてくれ。」

ギルが一方的に雪の魔女に質問するのを眺めながらミーツエは自分の順番を待ちました。やがてギルがすべての質問を終えてラルフと相談に入ったのを見てこっそりミーツエは雪の魔女に話しかけました。

『ギルの片目を取り返すにはどうしたらいいの?』

雪の魔女はミーツェをみてにっこり笑いました。

『同じ色の指輪を壊せばいいのです。』

『じゃあ、オ……最強の魔女を倒す方法は?』

『聖なる銀の剣で心臓を刺すのです。』

『……その剣はどこに?』

『神の国フルハップのモデリーニ教会のシンボルの中に。』

『フルハップの象徴ともいえる教会ね。セルーお兄様が居る……。
なんとかして、聖剣を手に入れるためにフルハップにギルたちを誘
導しないとー!』

ラルフと相談しているギルの方を見てミーツェは作戦を練ることに
しました。

頼もしい仲間

『雪の魔女さん、ありがとう。オリビエを救えたら、貴方の呪いもきつと解けるわね。その時は色々とお話したいわ。』

ミーツエの言葉に雪の魔女は微笑みました。

『最後に一つだけ……。私の呪いは解けるかしら？私は何ができるでしょう？』

その質問に雪の魔女は少し考えてからこう答えました。

『呪いは負の力。対抗できる力を貴方は持っている。貴方の呪いは許す気持ちから解かれる。』

『対抗する力って？』

『それは、祈り……。』

『許すって？何を……。？』

ミーツエの最後の質問はいつの間にか止んでしまった雪と共に消えて行ってしまいました。

雪の魔女は雪と共に消え、辺りは静かになっていました。

銀色に輝く地面がキラキラと光っているのをミーツエは名残惜しそくに少しの間見つめました。

ギルは雪の魔女と会えると雪の魔女に用意していた質問をいくつかしてカナルトの森を離れました。魔女を倒すのに必要なものが有るか……これに雪の魔女は頷きました。それはどんな武器かと尋ねると剣（剣）のところでもた頷きました。

「必要なのはオリビエを倒す剣。」

「文献でも心臓を突くとありましたね。」

「ただの剣ではない。「聖剣」だ。大陸に存在する聖剣は4つ。さて、どこから探すか……。」

地図を広げたギルがラルフと思索していると彼の小さな白い猫は地図の上をそのかわいい手で指しました。

「ミミ。そのかわいい手をどけてくれないと地図が見れないよ?」

ギルはそう言いますが猫はその場所をポンポンと前足で叩きます。

「…………。フルパップ…………?」

彼の白猫は嬉しそうにもう一度その場所をポンポンと叩きました。

「しかし、セルスロイが居る教会とは、厄介だな。」

「ギル様が黙っていたことなどバレているでしょうね。協力してくれるでしょうか。」

「ミミが危険だな。……でも、仮にも命の恩のある猫にひどいことをすると思うか？」

「……さあ？王女はまだ眠ったままなのでしょうか？」

「調べてくれ。ラルフ。取り敢えずはセルスロイと話をしよう。ミミは隠して置く。相手の出方を見るしかない。魔女を倒すという目的は一緒だからな。」

「わかりました。ではフルパップで情報を収集します。」

ギルはラルフに確認してからミミをバスケットに押し込みました。さて、多少難はあるものの、フルハップに行く事にしました。彼のかわいい白猫が誘導したというのもありますが、地理的にも一番行きやすい所から探すのも良い考えだと思っただからです。フルハップへ行くためにラルフが馬を用意しに行っているのをギルは宿屋の軒下で待っていると声をかける者がいます。

「おい、急ぎなら送って行ってもいいぜ？」

ウィンクしながらギルに話しかけてきたのはデイです。

「デイ！帰ったんじゃないのか？」

「レイラにギルを助けてやってくれと頼まれてな。急いで戻ってきたんだ。すぐにキジロに行くのか？俺の船なら4日で着くぜ。」

「ありがとう。助かるよ。でも、フルパップに寄るつもりなんだ。」

「……なにか、雪の魔女から聞いたんだな。お前は大した奴だ、ギル。」

デイは歡心してこの愛らしい甥っ子を眺めました。彼の大好きな姉レイラにそっくりなうえになかなかのやり手です。片目を失ってもその魅力は衰えることもありません。

「なに、ミミのお蔭なんだよ。俺の幸運の女神なんだ。」

「へえ。レイラが猫に褒美を与えた時には気でも狂ったかと思ったけれど、お前にとってよっぽど大切な猫なんだな。」

「ええ。ところで、デイはどうする？フルハップからキジロまで乗せてもらえれば助かるけど。」

「ふん。水臭いこと言うなよ。従者一人でテルゼの王子様が城を飛び出したんだぜ？レイラでなくとも心配するぜ。それでも腕には自信がある。ここからは俺も付いて行こう。」

レイラ王妃も回復し、ギルが魔女に片目を奪われた不名誉を一人で背負う必要はありません。テルゼ王も復活した今、大国テルゼに怖いものは無いのですから。

「イーサンも元気になったし、お前の為に兵を出してもいいと言っ

ているくらいだ。直接対決なんて危ないことをしなくたってお前の目は取り返す。」

「デイ。父上にも話したが、これは俺の問題だ。確かにオリビエは危険だが、自分で取り返さない事には俺が自分を許せないんだ。なんでも親や周りに頼っていて将来一国の王が務まるとは思えない。それに、母上との仲も上手く行ったんだ。きっと弟や妹の一人や二人増えるだろう?」

今度はギルがデイにウィンクしてみました。それを見てデイは豪快に笑いました。

「お前は実に良い男になるに違いない。」

デイはギルの頭をくしゃりと撫でると守るといふ決意の表れかギルの後ろに回りました。

ミーツェと白い猫

その頃フルハップではセルスロイが報告書を読んでいた。

先日キジロを訪問し、彼の愛する宝石が臥せっているのを見舞ってきたところです。魔女は増々キジロ王の心を捕らえ、国はオリビエの思い通りに動いて衰退していました。オリビエは毎日のように夜中まで騒ぎ、豪華な衣装を作らせ、高価な宝石を取り寄せていました。ミーツェ姫の部屋は塔の上に閉じ込められるように移動しており、セルスロイの手のものに内密に手引きさせなければ会えないようになっていました。セルスロイは人形のように横たわるミーツェの頬に、その愛らしい唇に自分の指を這わせてました。息はしてはいませんがあの、彼の愛した利発な王女はそこにはいませんでした。

「ミーツェをいつそのこと攫ってしまおうか……。」

セルスロイがミーツェに会っているのがばればオリビエはミーツェをどうにかしてしまふに違いません。後ろ髪を引かれながらもセルスロイはフルハップに帰ってきたのです。

「ああ。私のミミ。」

ようやくセルスロイが継承者としての教育を受け始めた頃、王妃の妊娠が発表されました。セルスロイは自分がお払い箱になったと周りからも冷たくあしらわれ、家族からも王宮からの援助が無くなるかと酷く落胆されました。多くの試験や辛い授業を耐え、望まれて王の養子となったというのに。初め、彼は生まれてくる子を誰よりも疎ましく思いました。しかし、生まれてきた子は女の子で、彼女はセルスロイに王宮での光となって彼を支えました。王宮に引き取られて孤独だったセルスロイに生きる希望をを与え、彼女が慕ってく

れたからこそ周りのものにも認められたようなものです。

「必ず、お前を取り戻してみせる。」

ずっとそばに居たいと思いつながらフルハップへ来て聖職者の道を選んだのはあのままキジロの後継者となればミーツエは他国に嫁入りしてしまうと考えたからです。小さなキジロでは周りの国との友好関係が重要です。たとえ愛娘でも……いえ、愛娘だからこそ有望な外国の男に娶らせたいとキジロ王も考えていました。だからセルスロイは国を出ました。フルハップで名誉ある地位を築けば後継者となったミーツエの夫として胸をはってキジロの王になれるからです。ふと、セルスロイが報告書の一部に目を留めました。

「テルゼの王妃が目覚めたと……。」

そこには数年間人形になっていたテルゼの王妃が数日前に目覚めたとありました。

「ミーツエの状態と似ている。」

そう言うと彼はテルゼに面会の申し込みするために手紙を書き始めました。

「セルスロイ様は先日キジロから戻ったばかりだそうです。キジロは今や破たん寸前で。」

ラルフの報告をギルは静かに聞いていました。

「果たして、会ってもらえるかな。」

「書状を送りましょう。」

「いや、直接尋ねよう。時間も惜しい。」

ギルたちはセルスロイと聖剣のあるフルパップの中心にある聖堂へと向かいました。大切なミミは外へ出られない様、ねこ好きデイに頼んであります。

ギルたちがセルスロイへの面会を打診するとすぐに会うとの返事がきました。セルスロイのほうもギルに聞きたいことが有るので願ってもない訪問だったようです。ミミのことで不信感を抱かれているのではないかと思っていたギルたちには拍子抜けの対応でした。

「……………聖剣……………ですか。」

「ああ。オリビエを倒すためにお借りしたい。」

「なるほど。確かにここにある聖剣は邪心を払う力があるというものの。オリビエを倒せる可能性は大きいかもしれませんがね。」

「あなたもキジロとは繋がりが深いはずだ。」

「はい。喜んで教会と交渉しましょう。……………ところで、テルゼの王妃が目覚めたそうぞ。」

「ああ。長らくの憂いも去って国も安泰するだろう。」

「当時の様子を詳しくお聞かせ願えないですか？少し、興味があるもので。」

セルスロイが自分の大切な猫のことに触れないことを良いことに、後ろめたさもあってギルは王妃の目覚めの経路を詳しくセルスロイに話しました。もちろんミミの事には触れず、言い終えた時にはこれで帰れるとホツとしたものだったのですが……

「すると、王妃様は初め、ゴブリンに姿を変えられていたのですね。」

「ああ。」

「次は、猫に……。」

「それは、雪の魔女に変えてもらえたらしい。」

考え込んだセルスロイはぼつりとつぶやきました。

「嫌われる姿に……と、言うわけですね。」

「え……?？」

「オリビエの結婚式で魔女を引つ掻いたというキジロのお尋ね者の白いあなたの猫は今どこに?？」

セルスロイはギルをまっすぐに見てそう、言いました。

その瞳はすべてを知っているとギルに物語っていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5058o/>

ねことお姫様

2011年10月28日11時09分発行